

神宮文庫所蔵本『月の行衛』（中巻・下巻）の翻刻

雲 岡 梓

はじめに

本稿は、『日本文芸研究』第六十八巻第二号（二〇一七年三月発行）掲載の拙稿「神宮文庫所蔵本『月の行衛』（上巻）の翻刻」の続きである⁽¹⁾。今回は、神宮文庫所蔵

本『月の行衛』（請求記号…五門一七六一）全三巻のうち、中巻・下巻の部分を翻刻した。本書は麗女の甥荒木田興正が『池の藻屑』、『月の行衛』を豊宮崎文庫に奉納するにあたり、その妻の尚女が文化七年に筆写したものである。なお、本居宣長記念館所蔵の興正宛「荒木田麗女消息」に、麗女が尚女に直接『月の行衛』を貸し出したことが記されているため、尚女が筆写した『月の行衛』は

麗女自筆の原本であったと考える間違いないだろう。麗女自筆本の所在が不明である現在、尚女筆写本は伝本の中で最も信頼性の高い『月の行衛』の写本である。尚女筆写本は神宮文庫において特殊本に指定され、閲覧が容易ではないため、ここに翻刻する。

なお、翻刻に入る前に、前稿発表後に気付いた誤りを二箇所訂正しておく。

・前稿19ページ下段10行目「『史籍集覧』第五九冊」→「『史籍集覧』第二冊」

・前稿20ページ下段2行目「上巻三十四丁、中巻四十八丁、五十五丁。」→「上巻三十四丁、中巻四十八丁、下巻五十五丁。」

一、活字本『月の行衛』の底本

以下に、現在までに発行されている『月の行衛』の翻刻を収める書を挙げ、そこに収載される『月の行衛』の底本に関する事項をまとめておく。

近藤瓶城編『史籍集覧』第二冊（近藤活版所、一八八四年）

末尾に「月の行方ハ荒木田麗女が三鏡の中間高倉安徳二帝の御世のみ女文のかけてなきをなげきて書けるなりといへり。今御巫清直氏の文化十四年丁丑九月秦光基写とある本を小杉楡邨氏再写し置けるを底本となして再訂せり」との識語あり。本居豊頼門の国学者小杉楡邨が、秦光基による文化十四年の写本を写したものを底本としていことがわかる。

※識語には稿者が句点を補った。

池辺義象編『校註国文叢書』第二二冊（博文館、一九一四年）

本書冒頭の校注者識に、「収むるところは蜻蛉日記、

更科^(マ)日記、浜松中納言物語、とりかへばや物語、月のゆくへ、方丈記なり。いづれも流布本を底本として諸本を参考し、句読を正し段落を明にし、つとめて読み易からしめむことを図れり。」と記される。『月の行衛』の流布本がいかなる本を指すのか不明であるが、麗女自筆の原本でないことは確かであろう。

古谷知新編『女流文学全集』第二巻（文芸書院、一九一八年）

本書には底本に関する記述が全くなく、所収の『月の行衛』がいかなる本文に拠っているのか不明である。

『校註日本文学大系』第三巻（国民図書、一九二六年）

本書冒頭の例言に、「一、月のゆくへ、池の藻屑は史籍集覧本を、豊鑑は群書類従本を、義経記は元禄刊本を本とし、本朝通鑑、大日本史野史、公卿補任、尊卑分脈、本朝皇胤紹運録、信長記、太閤記、聚楽第行幸記、義経記大令、義経記評判註等を参照校訂しました。」と

あり。『史籍集覽』所収の『月の行方』本文を底本として、
していることが明らかである。

二、書名『月の行衛』の意味

本書が『月の行衛』と名付けられた経緯は麗女の跋文に詳しいが、書名の意味については具体的に記されていない。しかし、跋文の記述を検討することで書名の意味も明らかにすることができよう⁽²⁾。跋文はまず次のように書き出される。

さきくも聞えし紫式部の六十帖の草子は、葉月望より書はじめ給ふとき、しに、今は其夜しも筆をとゞめ侍ることもやうかはりつれど、さりぬべき事と思ふなん、おこがましかりき。

これによると、石山寺に参籠した紫式部が琵琶湖に映える八月十五夜の月を見て『源氏物語』を起筆したという伝説に、麗女が自らを重ね合わせていることがわかる。

神宮文庫所蔵本『月の行衛』（中巻・下巻）の翻刻

そして、書名の由来については次のように記される。

名をばいかゝいはんとおもひわづらひたるに、月をみるく、人の「月の行衛などこそいはめ」と聞え給ふに、いとうれしう、まことにいみじき名なりとゆへありておぼえぬ。

『月の行衛』は本書摺筆後、書名を迷っていた際に人から提案されて付けた名であったことがわかる。「月の行衛などこそいはめ」と提案した人物は、本書の起筆から八月十五夜に摺筆するまでの経緯を間近で見てきた夫の家雅でもあろうか。そして麗女はこの命名を承け、跋文を次の和歌で締めくくった。

あくがる、心のはては千さと、もかぎらぬ月の行衛とぞ思ふ

この和歌を言葉通りに解釈すると、「身体をさまよい

出た心が行き着く果ては、千里ともその遠さを限ることのできない月の行く先なのだと思ふ」といった意味になる。「月を見てはるか遠くに思いを馳せる」という主題は、「月をみて千里のほかをおもふかな心ぞかよふ白川のせき」（続千載集・秋上・四五四・藤原俊成）や、「ながむれば我が心さへはてもなく行へもしらぬ月の影かな」（続拾遺集・秋下・三二〇・式子内親王）のように古歌にも例が見られる。

そして「月を慕って心が身体からさまよい出る」ことを詠んだ先行歌には、「月を見ておもふころのままならばゆくへもしらずあくがれなまし」（金葉集・秋・一八九・皇后宮肥後）、「あくがるる心の程は月もみよ千里の外ありあけの空」（新続古今集・秋上・四八八・飛鳥井雅経）、「あくがる、我玉しみの行糸をも千里の外月やしららん」（土御門院御集・魂・四四四）など例が多い。麗女はおそらくこうした先行例を踏まえて跋文の和歌を構想したのであろう。

しかし、麗女の和歌に詠まれる「月の行衛」とは、実

際の天象としての「月の軌道」であると同時に、何かを象徴した表現でもあると考えられる。先行の「月のゆくへ」という言葉で他の事物を象徴する例としては、「世に知らぬ心地こそすれ有明の月のゆくへを空にまがへて」（源氏物語・花の宴・光源氏）や「ほのみてし月のゆくへもしらぬ身はころのやみにまよふとをしれ」（林下集・下・恋愛傷雜・恋廿首よみしに・一九四）、「草のはら露をぞ袖にやどしつるあけて影みぬ月の行へに」（拾遺愚草・中・建暦二年十二月院よりめされし廿首・恋・一九七五）のように、恋する相手を月に例え、その行方がわからないことを嘆くものが多い。『源氏物語』以降、「月のゆくへ」という言葉は、「憧れの人の行方がわかならい嘆き」を詠む場合に用いられているのである。麗女の和歌もこれらと同様、「月のゆくへ」という言葉を「行方のわからない憧れの人」の比喩としていたのではないだろうか。そしてこの場合、麗女にとつての「行方のわからない憧れの人」とは、歴史物語に描かれる遠い昔の人々のことであらう。

また、和歌では「月」はしばしば「昔を映し出す鏡」であると詠まれている。「久かたの月はむかしの鏡なれやむかへばうかぶ世世のおもかげ」（玉葉集・雜一・一九七五・西園寺実兼）、「思ひいづるむかしににたる月かげぞふるきをうつすかがみなりける」（風雅集・雜上・一五六〇・和氣種成）、「見ぬよまで心にうかぶ秋のよの月やむかしの鏡なるらむ」（新拾遺集・秋上・百首歌たてまつりし時、月・四〇八・大納言顕実母）、「ながむればみぬ世の事もおほえけり月や昔の鏡なるらん」（御室五十首・秋・七八四・寂蓮）のように、こうした例は枚挙に暇がない。これらを踏まえ、麗女は「歴史を明らかに映しだす鏡」という意味も込めて、「月」という語を書名に冠していると考えられる。四鏡が「歴史を明らかに映し出すもの」という意味を込めて書名に「鏡」の語を用いているのに対応し、同様の意味を持つ言葉として「月」を配しているであろう。

麗女は『月の行衛』という書名について、「まことにいみじき名なりとゆへありておぼえぬ」と述べている。

神宮文庫所蔵本『月の行衛』（中巻・下巻）の翻刻

『月の行衛』が「遠い昔の人々の動向を追いかけて明らかにし、物語に書くこと」を象徴する名であると同時に、四鏡の「鏡」と同じく「歴史を明らかに映し出すもの」という意味を持つからこそ、「ゆへありて」と思われたのであろう。このような経緯で本書には『月の行衛』という題名が付けられたと考えられる。

さらに、麗女の発句・和歌・和文集『三の友』⁽³⁾には、『月の行衛』脱稿の一ヶ月後に詠まれた次の和歌が収められている。

九月十三夜に、八月半の夜は手ならい書とゞめて、月の行多などなづけしを思ひ出て

澄ぬべきゆくゑやかねてみせつらん八月に似たるけふのおもかげ

この和歌は「澄み切るにちがない月に行く先をあらかじめ見せていたのだろうか。『月の行衛』を脱稿した先月の葉月の夜に似た、今日の月の様子だ」といった意

味であろう。「澄ぬべきゆくゑ」という言葉には、麗女が実際に見た九月十三夜の月の美しく澄み切った様子を表すと同時に、『月の行衛』執筆によって「昔の人々の動向をこの月のように隈なく明らかにすることができた」という意味が重ねられていると考えられる。麗女が九月十三夜の月を眺めながら、『月の行衛』脱稿の満足感と充足感に浸っていたことが読み取れるのである。

注(1) 書名の表記には、写本によって『月の行方』、『月のゆくへ』、『月の行衛』の三通りがあり、統一を見ていないが、本稿では底本の表記に従って『月の行衛』とする。

(2) 書名の意味について考察する先行研究には、「月の行衛」を時代に翻弄されて移ろうように見える建礼門院平徳子の生涯を象徴する語であるとする時田紗緒里氏の論（『荒木田麗女』『月のゆくへ』論）和歌を中心に「『国文目録』五五、二〇一六年二月）がある。

(3) 荒木田麗女『三の友』は、天明七年成立。本文は富山市立図書館山田孝雄文庫蔵本（請求記号：W 911.3-3168）に拠った。

【凡例】

- 一、漢字の旧字体や略字、異体字は、原則として現行の字体に改めた。
- 一、底本の仮名遣はそのまま残した。
- 一、本文には、読み易くするために適宜句読点を補った。
- 一、本文には、必要に応じて濁点を付した。
- 一、反復記号「、」「／＼」は底本のままとしたが、「ゝ」は「々」に改めた。また、反復記号にも必要に応じて濁点を付した。
- 一、底本の漢字に付されている振り仮名はそのまま残した。振り仮名の仮名遣は底本のままであるが、適宜濁点を付した。
- 一、誤植等ではないことを示すため、「(ママ)」と傍記した箇所がある。

月の行衛卷の一下

西行法師とていみじき歌の聖なりけるは、往昔鳥羽の院につかふまつりし人なりし。かしらおろして国々修行しけり。いづれの年にか内の上につたへ奏し奉る事侍りけるに、かきそへて奉りける。

あと認てふるきをしたふ世ならなん

今もありへばむかしなるべし

たのもしな君きみにます時に逢て

心の色を筆に染つ、

此御代にはかやうの方すぐれたる大徳達さへおほく侍りしよ。長月、院のおはします法住寺殿にて今様合とか、ことに堪たる殿原三十人撰びて召せ給ひ、歌ごとに一番づ、勝負の御定めあり。大將師長、按察資賢、判者に召れてさぶらひ給ふ。はてには御遊もあり。いと今めかしうおもしろくて、殊に興ぜさせたまひ、院の御前今やう謡はせ給える、よにはめづらしき事にぞ人も申伝へ侍り。又の年は睦月の四日、法住寺殿に朝覲の行幸せさせ給ひ、御あそびありて上御笛あそばしつるを、院聞し召

驚きて、いといたう感ぜさせ給へば、上もうれしう思し召れて、御笛の師なる実国の大納言、正二位の加階給はせたり。大納言はめいほくありて、ことにかしこまり申給ふ。年のはじめより天が下瘡瘡といふ物あまねくて、人々悩み渡るなりと聞えしに、弥生には上さへ其御けしきおはしますを、大臣達も思しさわぎて、御祈かずにつかふまつらせ給ふ。さはいへど、上の御こ、ちはしうねげにもおはしませず、やがておこたらせ給えり。よの中にはなをわづらふ人絶ずとて、さやうの事により又七月、年の号あらためらるべう仰言あり。博士共とりくくに文字撰びて奉りしを、左右の大臣をはじめ上達部陣に参り給ひ、おのく定め申給ふとて、それはかれはなど聞えかはし給ひけるが、つゝに安元二年にぞなりぬ。長月には野分れいの年よりいみじくて、都も鄙もおどろくしう吹迷ひしほどに、横河なる根本の相も吹折られけりとよ。是は千年におよぶばかりの木にて、其うつほは慈覚大師かりそめに住給ひし跡とて、山法師ことに尊とびつ、みだりに人をよせじとて、めぐりに釘貫

しつらひ、鳥居など立たりしに、かく浅ましき事を、僧達いたく歎くめり。又、天王寺にも額をかけられし鳥居なん倒れ侍りにし。奈良にも山階寺にそこなはれ給える御仏おはしますよし聞ゆれば、内にも殿にも浅ましきことにおぼし驚かせ給ひにき。京にも人々の家共おほくたふれまどひて、おそろしげにて侍りし。冬つかた左大将、内大臣に成給へり。是は春の比、内大臣なりし久我の雅通の大臣うせ給ひし御かはりにや。小松の大将は此比こがね三千両をなむ、唐土の育王山に贈り給へりと聞ゆるは、いかなるゆへにか侍りけん。院のうへ、明ん年五十にたらせ給ふとて、内には御年満のこと思しまうけさせ給ひ、秋の比、中宮大夫なる隆季の大納言に仰言ありて、上卿つかふまつり給ひ、行事所はじめられ、道々の工どもめして、御調度何くれのよういつかふまつるべく掟給ひ、舞人などをもことにえらばせ給ふとて、さりぬべき家の子の君達にかねて仰言下りしかば、まだきよりとりぐに舞ども習ひ給ふめり。神無月にも猶此御賀のさだめとて、人々召れてたゆまぬ御いそぎなりし。

所々には物の音もひまなく、笛竹のよなく、木枯に吹合せたる声空にすみのほり、琴の調は独秀たる松にひゞき通ひて、とゞこほりなき声々にきほひて、月さへいとゞすみ増れるは、よのつねにすさまじき影などいふべくもあらず。都の内はいつとても時めかしう、冬のけはひの物さびしさもしらねど、今年は取わけかやうの御いそぎに今めかしうて過つ、春になりては又さまことに、梅の匂ひ、鶯の鳴音にも人々こゝろうきたちて、いつしかとおぼひたるに、睦月廿日あまり、院のうへうちぐ舞御らんずべく御けしきありて、舞人、楽人法住寺殿に参れり。皆布衣をぞきたる。御賀は弥生とさだめさせ給ひ、きさらぎ廿一日、閑院の内裏にて試楽あり。中宮も物見にまうのぼらせたまふ。童舞は胡飲酒、陵王、柳桜をこさまぜたる装束は折にあひていとほえぐしう、殿上にも地下にも物の上手おほかる比にて、いとゞおもしろく、若き君達とりぐに舞給ふ。いづれも御よそひなどの清らはさらにもいはず、容よういすぐれたる限りえらせ給へば、殊にめでたう、一人劣り給へるもなく見え

給ふに、権の亮惟盛のおくれて立出給ふる青海波の姿はしも、さらに立ならぶ人なくなまめかしうて、はかなく打ふる袖の匂ひさへよのつねならずめづらしげなるを、若き女房達かたはらいたきまでめでまどひつ、「光源氏のみじかりしためしもかくこそは」など聞えあへるに、みやも涙ぐましうせさせ給へり。昔の藤壺の宮の御思ひの筋にはあらず、是は唯ちかき御ゆかりなるを思し召る、が哀なるにぞ、人より殊に御目もとまらせ給ふるなるべし。又、小舎人雅行の君、わらはすがたうつくしうて、胡飲酒舞給えるを、上らうたう御らんじてことにほめさせ給ひ、御ぞかづけさせ給ふ。父の定房の大納言立給ひ、賜はりつる禄を肩にかけて、広廂にてけしきばかり舞給へる、いひしらずめづらしう、末の代のためしにもしつべうもてはやし聞え給ひ、上も御けしきよくて、いみじと思し召れたり。陵王は宗家の中納言の御子なめれど、是は禄も給はり給はずや有けん。此外左右の舞はさらなり、吹物も大かた若き君達仕ふまつり給ふとて、左の大殿の太郎君、頼実の中将をはじめ、中宮大夫

の御子三人、権の大夫時忠の御子二人、別当成親の御子二人、惟盛、清経は小松の右大将の御子なり。さての上達部の御子達もあまた召れ給ふ。楽の君達、大方中将少将なるに、別当の御子の成宗の侍従、宮の大夫の次郎なる時家の侍従まじり給ふは、何れもかならず衛府になり給ふべければなめり。古き例はべる事とぞ。こたびの御賀は康和の跡を尋ねさせ給ひ、それに事加へさせ給ふよし聞え侍り。御年満の日は弥生四日なれば、花の盛は過ぬれど、おほかたも物のおもしろき折にて、木隠れには風にしられぬ遅桜も猶残りあり。鳥の声、霞の色もなべてならず、空の緑りさへいとゞはへとゞしきに、行幸の御よそひも殊に引つくるはせ給ひ、つかふまつる殿原もとりぐに好みと、のへられたる御装束のうるはしさは、よにめづらしきまでなり。人々は試楽の日のめでたかりしにこと尽ぬと思ひ給へしかど、今日は又ことさらなり。舞の君達は高麗唐土の綾錦を裁かさね、世になき匂ひをつくして、色もつやもおぼろけならんはあひなしと、おのゝ物ぐるはしきまでいどみかはしたまひしも

しるく、さまゝのきよらはいづれか劣り勝るけぢめあらむ。唯ひとつ物にて、日影さへ霞もあへず掲焉にもてはやされてかゝやかしきさまなり。大臣達、上達部、皆御まへのすの子につき給ふ。中宮も行啓ありしかば、女院もことに御心づかひせさせ給ふめり。御かたゝの女房、童のなり、姿などうるはしうと、のへさせ給ひ、いろゝの衣どものこぼれ出たる几帳のほころびは、猶梅の匂ひを残すばかりなつかしき薫りに、御簾の追風さへなまめかしく、いとえんなりし。時なりて楽人参る。くまもなく晴たる庭にうつらふ日影もうらゝにて、飛かふ蝶も舞の姿にかよひ、囀る鶯も物の音を添るにやと覺えて、打吹風も春おもしろき声に聞渡されたり。物見る女房達は心もをき所なげにて、ながき日さへあかず、程なきやうにて夕かげになり行空も口おしげなり。此日ことにめづらかに侍りし事は、右の大臣の御隨身中門にさぶらひける、着たりし平札の烏帽子を風にとられつる、舞の場に吹もていきて、風のまにゝ飛めぐりしこそ、よに浅ましう人々見あさみ侍りつれ。隨身も恥かはしうや

思ひけん、すなはち逃てまかではべりにし。又の日も上猶おはしませば、人々昨日にかはらず参り給ふ。女院、中宮の女房達に、若き君達うちまじり給ひ、池の方なる舟に乗て漕めぐらし給ふ。とりゝに物の音出して遊びたる、いとおもしろし。又鞆をも御らんずとて、其方に堪たる君達下立て仕ふまつり給ふ。是はためづらしう、内も院も興せさせたまふ。夜に入ては御前の御遊びはじまりて、右の大殿、内の大臣琵琶ひき給へり。箏、笛などを殿原とりゝに仕ふまつり給ひ、唱歌の人々御階に参れり。昨日のおどろゝしかりしにひきかへ、けちかうなつかしく、殊に心も澄増る夜のさまなり。翌日六日は御賀の後宴とて、楽人、殿上も地下もみな龍頭鷓首に乗て最勝光院の廊の方より御前に出るほど、池のさゝ波も庭の松風もひとつにきほえる糸竹の調は、たゞ千年の声とのみき、わたされたり。今日は上も御笛ふかせ給ふ。ことさらにめでたう、世になき音の限り吹とをさせ給へるいみじさに、院の上御目おしのごひつ、聞し召る。御前なる人々もおとなしきは涙落して、たぐひなう

思ひ奉れり。かやうの事のまぎれにや、歌などは語り伝ふる人も侍らず。いみじき歌人おほき折なれば、さこそおもしろきも侍りぬべけれど、口おしうえ聞置侍らずなん。事はてぬれば、人々賞行はせ給ひ、上も還御の儀になる。御贈物、人々のかづけもの、御心ことに思し掟て、花族も下臈もほど／＼にめでたうせさせ給えり。去年よりこと／＼しき世のひゞきなりしを、さばかりなくてとげさせ給へれば、内にも御胸あきてうれしう思し召るべし。かう何方も御心ゆくさまにて過させ給へば、千代を経るともあくよあるまじき御代なりと、殿原もこよなうおぼいたり。卯月に法皇、山にて御戒受させ給はんとして御幸あり。さきにも東寺にて御受戒侍りき。又山よりかへらせ給へば、有馬の出湯あびさせ給ふとて、そなたに御幸なる。こたびは女院をも具し奉らせ給へば、いと所せき御ひゞきなり。女房達都の外の御ありきのめづらしさに、我も／＼としたひ参らすれど、よのきこえもわづらはしう、物さはがしきやうにもこそとて、かたへはとゞめさせ給ひ、さりぬべき限りさぶらはせ給へり。

笠に縫てふなどいひし眞菅生る岩根の道をわけ入らせ給ふに、山のけしき、水の流れも都にかはりてめづらしう御らんぜらる。古へ宇治のおほき大臣の「まづ来る人に」（マツ）と読給ひしも爰にてのことなりと人々聞え出るに、資賢の大納言御供にてさぶらふ給ひけるが、湯の明神をば三輪の神なりとなむ申侍ると聞て、物にかきつけらる。

めづらしき御幸を三輪の神ならば

しるし有まのいでゆならまし

忍びさせ給ふ御程なれば、御心長閑にもおはしまさず、やがて還らせ給ふ。高松院ときこえさせしは、一院の御はらからにて二条の院の后におはします。はやう御ぐしおろし給ひ、院号の御さたにておはしますけるに、水無月隠れさせ給へり。こなたにさぶらふ右衛門の佐といひし女房は、歌読（マツ）の教にも入て侍りし。此院は八条の院の御おとうとにおはしますき。八条院は猶残りおはしまして、其方にも高倉、六条など、皆世にしられたる歌人にて、撰集にも入侍り。女院も此ころあつけにや、御心地

れいならずものせさせ給ふとて、院にも内にも思しさはがせ給ひ、御祈こちたうせさせたまふ。御修法も所々にておこなはる。行幸も有ぬべく思し召ける程に、七月八日、つるに浅ましうならせ給ひぬ。内には物も覚えさせ給はず臥沈ませたまふ。院もとりわけたる御思ひなりしかば、たゞおくれじと思しまどはせ給ふ。御年さへ三十に五あまらせ給へば、いまだあたらしき御程におはしませを、さぶらふ人々も惜み奉らぬなし。よの中諒闇とて内わたりもかひしめり、上もゆゝしき御ぞたてまつる。殿上人などもみな夕べの空の色したる衣どもは、みるゝ涙のつまなりかし。内にも院にも尽せず物哀なる御事のみなるに、又同じ月にも先帝かくれさせ給えりと奏しつるものか。上いと浅ましう、世や尽ぬらんといみじう思し召れたり。此院はまだきびにはおはしますほどにおりさせ給ひ、いまだ御冠の御さたもなく、御童姿にて過させ給えるもいとめづらかなる御事になん。今年ぞ十三にならせ給へり。二条の院の皇子にて、一院の御孫、内の御姪におはします。二にて御位に即せ給ひ、五

にて下させ給ふ。御元服さへなくて太上天王（ミヤ）と聞えさせしは、古き例もおさゝ聞えぬことの上よし、其世の人は申侍りし。内も院も親しき御あはひにおはしませど、いかなるにかさのみかはずまへられさせ給ふ事もなきやうにて、御幸などもなく、心苦しういとおしき御さまにぞ侍りし。さはいえど日比一院の御方におはしまし、に、御なやみによりて邦綱の大納言の東山の家に出させ給えり。やがて栖霞寺におさめ奉り、六条の院とぞ聞えき。二月の程に院三所なくならせ給えるを、やすからぬ事に世の人も思ひいひ、何となうよの中あはたゞしきやうなるに、上は女院の御思ひにしづみ入らせ給へば、大殿も此ほどは内につとさぶらはせ給ひ、上達部などもまかで給はず。関の固め、陣の守りとして、九重の宮の中さへ例ざまの長閑けさにはあらず。上は日比になれど、いみじき御歎きはなぐさめがたうせさせ給ひけるが、せめて御涙のまぎらはしにや、二間にて御経か、せ給ふ。御本は道風の手にて、いろゝの色紙に文字は墨なり。さきゝの例尋ねさせ給ひ、たがはぬ紙をなむ召れき。八月

の末、御わざのころかきはてさせ給ふとて、山の座主に御衣一かさね、法ふく二くだり、絹二十疋、綿など賜はす。頭の弁長方、御使にて山に参り給えり。又此御法事の比にや侍りけん、中宮の大夫、観音の誓ひを思ひて、たのもしきちかひは春にあらねども

枯にしえだも花ぞ咲ける

中納言の君とて女院につかふまつりける女房、うへ置せ給える御前の前栽の此比盛なる中に、女郎花の咲こぼれたるをみて、

露消るうきよに秋のおみなへし

ことしもしらぬ色ぞかなしき

何ちも露けき秋にて、中宮も物哀に詠させ給ふ。内にはゆ、しき御しつらひはいととう改められしかど、御涙ばかりはひがたうせさせ給ひ、萩の上風、萩の下露につけても、木の葉よりけに、もろくふり落る御心地せさせ給ふま、に、「腸を断是秋の天」と絶ず御口ずさませ給ふ。月の比も御遊などもせさせ給はず、内渡りも物冷じげなり。此比又九条の院もあへなき御事なりと聞ゆ。二条の

院の后にて、仁安の比院号えさせ給ひ、さまかへて静に行ておはしまはし、^(マ)四十に五、六あまらせ給へりとなん。院と聞えさする御かたゝ打つゝきかゝるを、一院にもきし方行先ためしも有がたう、浅ましき事に思し召れたり。さらば女院の御事の後、いとゞよを常なき物に思ししらせ給えるにや、いとけなき宮達をば仏の道に入れ奉らせ給ひ、一所は御室の御弟子にならせ給える。十月、其若宮内に参らせ給ふ。上の御子の御定めなればなめり。今一所もおなじやうに内の御子にならせ給ひ、十一月参らせたまふ。此宮は山なる明雲座主の御弟子にぞおはします。いつしか年も暮て、又の年陸月の司召の比、内の大臣、左大将退給ふと聞ゆれば望み申人々おほし。花山の院の中納言などもかならずなり給ひぬべき人からなれば、もしやと思すに、院の別当大納言いかでと思ふ心ふかく、仏神に祈申つゝ物ぐるはしきまで思ひ入れど、公にはいそぎても召さず。音もなく二月は過ぬ。三月始、大将の御定めあるよしなれば、所々むねうちさはぎていかならんとおぼいたるに、思ひの外に右大

将左にうつりて、御弟の宗盛の中納言、右大将に成給える物か。望みつる人々は中々ことさましにて、浅ましともいはん方なし。成親の大納言、人わらへに思し歎く事限りなく、さるは六波羅の入道の心のまゝなるよにて、こたびの事もあの入道のとり申されけるによりてなむ、さしもあらぬ人におしけたれぬる事と、いと心づきなう腹だ、しう成ぬ。此大納言の妹の君は小松の大将の北の方なるうへ、我御女をば惟盛の少将にあはせ奉り給ひ、丹波の少将、又入道の御弟なる門脇の宰相の御婿なり。かたゞにはなれぬ中らひにいましけれど、大納言はこの一ふしに心乱れしよりこよなう思ひうとみて、はてはあるまじうむくつけき心つきつ、いかで此入道の一ぞうほろぼすわざもがなと、あながちに思ひより給へるこそいと浅ましき事には侍れ。殿は一年閏白の宣旨かうぶらせ給ひし折、太政大臣をも辞し申させ給ひしかば、今年内の大殿に太政大臣の宣旨あり。小松の大将大納言にて居給ふを、内大臣になさせ給ふ。又、此大将のかはりの大納言には、前の大納言実定の久しう籠り居たまえる

を、出給ひぬべき仰言ありて、再び大納言にかへりなり給えり。いとあらまほしき事を、よにもめでたくおもひたり。大納言は春日の神の御光りあらはれぬる事といみじうおぼしけり。此事は応保の比、中納言にていましけるが、日吉の行幸の後、実仲の中納言二位に成給へるに、此中納言、おなじほどの人に加階こえられぬる事のこと、ろやましうて、よの中すさまじう思ひなりつ、宮仕も怠りがちに、陣に着む事も物うくはしたなくて、実仲の中納言参り給ふ折は出給はずなどして有経るに、父大殿の大炊の御門の家に行幸ありし日より、よろこび加へて従二位に成給えり。されど猶下臈なるを、や、ましう思ひ居給ふに、長寛二年閏十月ばかり、大臣召の有けるつゝに大納言にಾಗಿ給ひき。か、れど猶心ゆかず思ひて、永万二年八月、大納言にかへて正二位の加階を望み給へり。さるは大納言をやめて加階の例はめづらかなりとて、内にも思しなやませ給ひしを、あながちに歎き申つ、とかくして正二位し給へり。彼実仲の君越かへさんの心のみ深くて、かくまでおもひなり給ふるな

り。さて大納言かへさい申てこもり給ふを、よの人もあいなき事に見聞え、みづからもよの中ものうく思す物から、忍びて春日の御社に詣給ひ、心をおこして行ききを祈申給ふに、若宮の御告とて、いといちしるき事ものしければなむ、頼もしうて出給ふとて、宮奴どもにもさま／＼に物賜ひなどして、猶たゆみなく祈をもつかふまつるべうの給ひ置たり。さてなん嘉応の比、住よしの歌合とて人々のす、め給へりしかば、読^{マヤ}てやり給ふとて、述懐のこゝろを、

かぞふれば八年になりぬ哀わが

憑^{マヤ}みしこともきのふと思ふに

又、唐歌つくり給ふにも、

罷官未忘九重月 有恨将逢五度春

などいひ居給ひしほどに、今年思ひかけずかゝるよろこびあるを、いとかひありて、こゝらいぶせかりしむねあきておほいためり。小松の大臣はよろこび聞えに所々参り給ふに、右大将御供にておはしけるが、殊にめでたう見えければ、藤壺の女房の中より聞えたり。

いとゞしく咲そふ花の梢哉

三笠の山に枝をつらねて

大饗もすなはちし給ふ。尊者には左の大殿参らせ給へり。祿などは定まりある事なれば、唯よになき清らを尽してめづらしうし給えり。卯月の比、山の衆徒ども日吉の御輿を振おろし奉り、十三日内裏に入奉らんとしければ、内にも驚かせたまひ、人々に仰せて御門／＼を守らしめ給ふ。内の大臣は左大将にいましければ、兵どもしたがへて防ぎ奉らんとし給ふほど、法師原もあるはそこなはれ、あるは命をうしなふなど、きしかたためしもありがたきさまなり。九重の御門／＼は源氏、平家の武士共こゝらさぶらひて守り聞えさすれば、山法師かなひがたくて、御輿をも打捨、ちり／＼に逃てまかりにき。内にもすべなく思し召るれば、祇園の別当なる澄憲に迎へ奉るべく仰事ありて、夕つかた、そなたの神つかさ共御むかひに参りてゐて奉れたり。山には猶残り給へる御輿をも振下し奉りてんとよういするよし聞えしかば、上もむくつけう思し召れて、又の日俄に院に行幸おはしま

す。此事は山法師の訴へ申事あるを、院の御前聞し召入れぬやうなりとて、かくなめげなるまひつかふまつれるなどぞ、院もめざましうは思し召るれど、衆徒の心なごめさせ給はんとて、時忠の大納言を御使にて山につかはさる。さてなむやうくしづまり侍る。同月廿八日夜中ばかり、樋口富の小路とかいえるわたりに火出来ぬとの、しりけるほど、巽の風はげしう吹出つ、北に向ひていやましに焼もてゆく。其方なる人々の家ども残るまじげなるもいと浅ましとみるに、大内の方さへあやうく、朱雀門より北は八省、小安殿、大極殿、大学寮、神祇官、八神殿、真言院、勧学院などことごとく時の間の煙となりて、大内も残るまじげなるに、年比預りにて守り聞えさする源の頼政いみじき心を起して、八幡の神を念じ奉れりしかば、其御しるしありて鳩の飛めぐりけるまゝに、忽風なをりてまぬがれたりしこそ、めづらかなる事に後まで人申あひ侍りつれ。たかきいやしき人々の家共の塵灰と成ぬる事は、かぞへやらん方なし。閑院の内裏さへまぢかうおぼへさせ給えば、上も御腰輿にて邦

綱の大納言の家に渡らせ給ひ、中宮も行啓なる。行幸に仕ふまつり給ふ上達部などもおほからず、何の御儀式もなく、とりあへさせ給はぬ御さまなり。内侍ぞ聖の御籠とりてさぶらふ。かう恐ろしきけぶりのまよひに、こゝら作りみが、れし人の家々、日比きらくしかりし玉の台など、みるく跡方なく成行は、むかしより例ある事には待れど、さしあたりてはめづらかにも浅ましうもいひやらんかたなし。此折なん、融の大臣の河原の院をはじめ、古への跡と聞えし所々皆やけ失侍り。又博士何れの人々家に火移りては、年比かくしもたる文書共のなくなりぬるをぞ、よにも惜み聞え、公にも口おしう思し召れにし。何事よりも大極殿の焼ぬるをなん、内にも大臣達も安からず、さきく例も多からねば、よのなかあらんとうしろめたう思し歎かる。あくる日、上閑院の内裏にかへらせ給ひ、やがて廢朝など聞ゆるも大極殿の火の事によりけるにや。すべて此火のけはひに、都の中三が一あさましようなりて、たまく残れる所もまたからぬおほかりき。いかなる事にかと人々あさみあへ

るに、かたへは日吉の御崇りなりといえるもまがくしき事に侍り。院の御前、ありし御輿振の事などにつけても、山法師を心づきなう、ひたぶるになめしと思召れければ、座主にていましける明雲僧正、御かうじのよし仰られて、五月座主をも止められ、僧正をもとらせ給ひ、伊豆の国に流しつかはすべく御定めあり。山に聞付て衆徒共院に参りて、座主の流木となり給へる例もいまださぶらはぬよし申、又院に御戒さづけ奉り、内の御祈の師なるよしをもかこちて愁へ申つれど、院さらに聞き召入させ給はず。すなはち覚快法親王座主にならせ給ふ。前の座主をば直人になし聞えて、同月の廿三日遠つ国につかわさるとて、非違の人々付そひつ、都を出つるに、山の大衆、粟津野のわたりに待うけて、いくばくもなく僧正を奪取て山に帰りぬ。院に聞せ給ひ、いとゞしき御けしきにて、成親の大納言に仰言ありて、山を責させ給ふなりと聞えしかば、衆徒もいかにせましとさすがに思ひなやみたるに、其後は音もなくて、水無月一日、成親の大納言俄に六波羅におしこめられ給ひき。此外も院につ

かふまつる人々の家には、六波羅の侍共ゆくりなく押入て、人々をとりもていくさま、いひしらずむくつけし。大納言の御子丹波の少将をば、六波羅の入道教盛の宰相にいざなひ給えと消息あり。宰相びんなく思しけれど、いなみ給はんやうなくて、少将ひとつ車にておはしつ。殊に悲しうし給ふ御婿なれば、いかならむとうしろめたう思すめり。六波羅には大納言のうちく思しかまふる事をはやう告しらするもの、有けるにぞ、入道いたう聞あさみつ、、いちはやき心に任せていさ、かのどむる方なく、たちまちにかくさはぎ給ふ成べし。西光法師もおなじ時からめられける。やがて失はれき。子ども、師高、師経など、皆うしなはれたり。入道は大納言をも同じやうにとおぼいたりしかど、小松のおとゞのあながちに申給へばなん、吉備の国に流しつかはすべく掟給ふ。山法師は前の座主の罪にあたり給へる事は、西光法師が儂言によりてなりとこゝらにくみしに、かくと伝へ聞いていみじうよろこびあひ侍りとよ。六波羅の入道はあたまえし人々をばめしとりしかど、なをこゝろゆかずおもひ

て、院をも何方にまれ御幸なしたてまつらん、こたびのことばは院もしろしめしてし事なればと、おほけなきころさへつきて、法住寺殿に参らんとよういしつ、御子の殿原さりぬべき侍など召あつめ給ふ。人々ゆゑ、しき武士姿共にて参り給えるに、内の大臣はことなしひに御よそひも常にかはらず、なよらかなる直衣系ほしにて入おはしたり。入道をはじめ、人々なまはしたなく、大臣の心はづかしげなるもてなしに、あひなうつ、ましく覚え給ふ。大臣はとばかり物もいはで見渡し給ひけるが、兄弟の殿原のことゝしげなるさまどもをよういなしとあはめ給ひ、入道をもえもいはぬ言の葉に、昔今の例を引かづけつ、かつは涙おしのごひて、いみじういさめ聞え給へるにぞ、さすがにかしこき人の言は、子ながらもそむかん方なくて、入道も心とけ給へるにや、院に参り給はん事はとまり給ひぬ。さてぞ大臣もうれしうおほいて帰り給ふ。かの宰相のいたはり給ひし少将も、なくく鬼界が島の流れ木と成給へり。平の康頼、俊寛僧都も同じ所に遷され給へり。前の座主も御かうじゆるさせ

給ふよし宣旨下りしかば、うれしう覚へ給へど、猶都の中はむつかしうや思しけむ、浪花の方に行て住給へり。文月は故女院の御はてとて、いぬる月最勝光院にて御齋会侍りしに、御正日ちかき比にて御八講行はせ給ふ。御経は上のか、せ給えるなりとぞ。よにめづらしき事に、五巻の日などはことにいつくしき御作法なり。院、後の宮と御捧物とりくにめでたうせさせたまへり。七月十日、人々御服ぬぎて大祓あり。八月又の年、号も治承に改りぬるは、大極殿の焼ぬるによりてなめり。積奠も大学寮焼しとて、官の庁にて行はせ給ひき。内の大臣は大将退給ひしとて、又望み申人々ありしに、師走の比、実定の大納言なり給へり。春のよろこびだにあるを、打つゞきおもふやうなる事の、目もあやによの人思ひ聞ゆ。かたへは厳島に参り給ひししるとて、六波羅の入道のとり申たまえるなどぞさゝめき侍りしか。又の年卯月春に行幸あり、殿をはじめ上達部、殿上人こゝらつかふまつり給ふ。倍徒（てい）なども心ことにえり調へさせ給ひ、何事もめづらしからんさまにと思しおきてたり。平

家の人々も皆参り給ふ。何れもあざやかなるよそひさう
くしう、御車ども、清らにさうぞき、御馬にはえもい
はぬうつし共置たり。こよなき見物とて、物見る人々道
もさりあへず、かしこにおはしましつきて御神樂奉らせ
給ひ、数々の神宝所せげにもてつゞけらる。上は賀茂、
石清水などには二度も行幸せさせ給ひしかど、此御社は
はじめて詣させ給ふれば、山の姿、草樹のたたずまひを
も、いとめづらしう御らんじ渡さる。衆人共のとりく
なる物の音は、三笠の山の松風のまちとりたるもいみじ
く、舞人のかなづる袖には榊葉の薫りさへ通えるがなつ
かしう、いひしらずおもしろく、誠に神もうれしう御ら
んずべう人々もおもひたり。上あかず思し召るれど、都
の外にはさのみとゞこほらせ給ふべきならねば、いそぎ
還らせ給ふ。宗盛の大將此御供にさぶらはれけるが、帰
らせ給へるすなはち、大納言になさせ給ふ。中宮春の比
よりなやましうせさせ給へるは、たゞならぬ御事のよし
聞ゆれば、上いとめづらしう思し召る。六波羅の入道う
れしき事におぼす物から、かつはゆ、しうて、まだしき

に御祈こちたくし給へり。宮常にくるしうのみせさせ給
へば、いかさまにかと二位殿などもうしろめたう見奉ら
せ給ひ、御修法もあまた壇にて行はる。其程ちかうなら
せ給へば、又々御祈しそへさせ給ふ。霜月十日比より御
けしきありて悩ませたまふとて、人々みな六波羅につど
ひ参る。内よりも御使ひまなし。御物のけなど、おどろ
くしう名乗出るもいと恐ろしきまでにて、山々寺々に
有とある僧達残りなう召あつめられて、所せき御祈な
り。山の座主の宮、仁和寺の宮なども参らせ給ひ、さま
くの法共行はせ給ふ。日比の御祈に打そえてよの中ゆ
すりさはぎ、諸社の神馬、所々の御誦経の御使に四位五
位数を尽して鞭を揚るさまいはんかたなし。宮の御はか
し御ぞども、御誦経にはこび出らる。入道のさばかりた
けうお、しき心も、かゝる折はいづちいにけるにや。い
ふかひなく心ぼそげなるさまして物も覚えず、唯手をす
りて仏神をねんじ居給ふ。内の大臣をはじめそらの殿
原、かつは平家のすくせもみゆべき事と思せば、いみじ
う心を尽し給ふ。又の日も猶覺束なくなやみ暮させ給へ

ば、十二日には院さへ御幸ありて、御心ぐるしう見奉らせ給ふ。此物のけのしうねき、いとふびんなるわざ哉と思し召れて、近き御帳の下によらせ給ひ、忍びやかに千手経遊ばす、いとく尊とくて、近うさぶらふ限りは涙落しつるに、此物のけのいみじげによばひの、しりつる声どもの、すこししづまりぬるやうなりしかば、からうじて生れ給ひぬ。人々心おちみたるに、宮の亮重衡、御簾の外に出て「御産平安、皇子誕生」と、高やかにの給ふにぞ、内にも外にもよろこびの声とよみたり。入道、二位殿などは唯よ、と泣給へる。ことはりとはいえど、まがくしかりき。法皇も御心おち居させ給へば出させ給ひ、今熊野へ御幸おはします。僧達やがて御修法の結願とて、したりがほに汗おしのごひつ、いそがしあへり。いつしかと内に奏し給へば、限りなううれしう思し召れて、いそぎ御はかし奉らせ給ふ。内の大臣は六波羅につとさぶらひ給ひ、事掟給ふ。宮の御ゆかりの殿原、みなうへのきぬにてさぶらひ給えり。関白殿をはなちては、大臣達より末の上達部、御よろこび聞へに参り給は

ぬなし。宗盛の大将はしたしき御あはひなれど、北の方文月に失給えば、はかりありて参り給はずなん。御乳つけには権の大夫のうへ参り給ふ。やがて御乳母にて帥の典侍など聞え侍り。御験者の法親王達、僧綱達、さらぬ法師原までほどくくに、ろくどもいかめしう思しまうけらる。御湯殿の儀式などはいふもさらなり。例のさほうに、内の典侍おり立てつかふまつる。弦打の五位六位なみさぶらひ、御文の博士つるばみのよそひにて庭に参り、孝経の天子の章よみたる、いとめでたく、護身の僧もやむごとなきを召る。君達はすの子にぬ給ふ。らうがはしきまで打まき散しの、しりたるもいと花やかなり。あしたの御湯はて、又夕べの御湯殿の事さきのま、なり。其後寝殿の南東の間に白き袖口ども打出て、白き御屏風たてわたし、公卿の御座まうけらる。上達部参りてつきなみ給へば、座の末に頭の君達、さらぬ上人もあまた参り給へり。御前の物ども、兒の御衣机は殿上の四位共はこぶ。御盃めぐりて、「佳辰令月」などれいの事なれど、打出る声さへめでたう聞えたり。女房達の白きよ

そひも殊にはへくしう、折から雪の色さへひとつ物にて、たゞ鶴の毛衣たちかさねたりとのみ見渡さる。打つぎ五夜七夜などもおもしろく、男皇子にさへおはしませはいとゞかひある光りにて、入道殿も二位殿もおもふやうなる御事をめいばくありて覚え給ふ。「枝ながらこそ」などやうの歌もありぬべき折なれど、あまりなるまでいみじげなる事どもの中には、出ばへの有がたきや、さらに聞ゆる事も侍らずなむ。此御産の御祈の程に、つみある人々ゆるさせ給ふといふ定めありて、遠つ島守なりし丹波の少将、平の康頼もめしにつかはすとて、六波羅より人出し立給へば、宰相も迎えの人をそへ給ふ。宰相はうかりし別のまゝになぐさむ方なう恋忍び給ひけるが、程もなくゆるされ給ふよし聞ても、まづよろこび泣し給ひつゝ、いつしかと待おはさうず。俊寛は猶入道ゆるし給はず。成親の大納言はかしこにて失給へりと聞えき。中宮はおそろしかりし御事のなごりしばしこそあれ、さのみなやませ給ふ事もなくてさはやがせ給ふ。若宮は御五十日をだに聞し召ぬに、年の暮には坊に

居させ給えり。いとあらまほしき中宮の御さいはいを、終にはあるべき事なれど、さしあたりては目驚かるゝまにぞよにも聞えさす。宮の右京の大夫の君は、日比まかで、ありけるが、此御事を伝へ聞て、里にて遙に思ひやり奉りて、

雲の余所に聞ぞ悲しき昔ならば
立まじらまし春の都に

師走の末、源の頼政三位し給ふ。是はいみじき歌人にて、やむごとなき人々にもまじらひなれつゝ、年比大内を守りてさぶらひける。二条院の御時、まだ殿上もゆるされざりしに、月のあかき夜、大内に行幸おはしまし、御供の女房の中に申送りし。

人しれぬ大内山のやまもりは
こがくれてのみ月をみるかな

などいひしに、代かはりて仁安のはじめ殿上ゆるされて、程もなく四位の加階をさへしたりし。其よろこび聞ゆるとて、重家の君、

まことに(ママ)や木隠れたりし山守の

今は立出て月をみるかな

とありし返事に、頼政、

そよやげに木隠れたりし山守を

あらはす月も有ける物を

当代も御覚えありて加階など心もとなからず、院さへ御給などの御かへりみありて、殿上をもゆるさせ給えり。

今はいたく年老にしかば、一年尚齒会にもかずまへられ侍りにし。源氏の武士なれど、いにしへも義朝などに心をかはす事もなければ、六波羅の入道もかけしき心はなきなめりとうしろ安く、いさゝか心もをい給はず。かゝるよろこびをもかへりて見やすく思しけるも、平家のみ時めきぬる世に此人ひとりのみなん、源氏にて昔にかはらぬさまなりし。子どもさへかひくしう、ほどくにつかさえて仕ふまつれり。女子も二条の院に宮仕して讃岐と申し、よろしき歌あまた聞え侍りき。年帰りては、内渡りのはへくしきはれい事なれど、今年は春宮の御年まさらせ給えるをなむ、上も後の宮も取分かひある春の光りに思し召れたり。御葉の事など、内の御

前の作法にかはらず、御いたゞきもちゐる有ぬべけれど、三日申の日なればとてゞめらる。二日又御衰日とて御葉ばかり奉る。内には朝覲の行幸あり。夕つかた舞をも御らんじて、夜に入ぬれば御前の御遊びあり。上人達引ものふき物とりくゝに給はりて、あなたうと、青柳などあそばせたまふ。いたく更てなむかへらせ給える。御贈り物にめでたき御本、御馬二つ奉らせ給ふ。御本は土御門大納言とり給ひ、御馬は資盛の少将、資盛（ママ・衍字）の少将、資時の少将引給ふ。院の人々の加階もさきくゝのまゝにて、御馬引し少将達、四位になさせ給ふ。三日にぞ宮の御戴き餅は侍り。御五十日は朔日なりしかど、日つゐてよろしからずとて、六日其御事侍り。古き例しを尋ねさせ給ふに、御五十日よりさきに坊にあさせ給ひし事はまだ例もなしとて、長治の比、東宮の御袴着、親王の御百日などの御儀式を引せ給ふとぞ。所々の御装束うるはしうして、ときなりぬれば宮出させ給ふ。白き織物の御細長、御小袖奉り、内の御乳母の三位抱き奉らる。近衛の局御はかし取てさぶらひ給ふ。御台六つ立て御物参る。

宮の権の大夫陪膳つかふまつり給ふ。市の餅奉るとても、十五日よりこなたは東の市にて買るゝにや、殿をはじめ大臣、(マ)上腕カ達部の饗いつくしうて、女房の中、殿上藏人所みな衝重給はず。中宮の御方の女房の中、侍所さらぬ所々までかずゝに給ひ渡す。内の殿上、台盤所などは坑飯なり。今日の衝重、坑飯などは、かねて国つかさの人々に仰言ありて、とりゝに調じて奉れり。宮の御台おさめて御しつらひ改まりぬれば、上渡らせ給ふ。御直衣奉り、定能の中将、昼の御座の御剣取て御前に参り給ふ。御もの参り、人々にみき賜はせて楽人をも召る。又、御前の御遊ありて拍子はあぜち大納言、付歌宮の権の亮、笛藤大納言、笙六角宰相、篳篥頭の中将、琵琶新宰相中将、箏春宮権の大夫、和琴左の宰相中将なり。いとおもしろくて伊勢海、万歳楽などかずゝに遊ばせ給ふ。はてつ方に人々に禄給はずとて、殿、大臣達大掛一重、大納言、中納言達同じ掛一領、宰相達も同じごとくづけ渡さる。殿のは宮の権の大夫とり給ひ、御禄のよしけしきばみて御隨身に賜ひにき。人々しぞきぬれば、中

宮出させ給ひ御物参る。御作法かはらず懸盤六などにや、陪膳は中宮大夫なり。中将、少将なる上人達とりつぎて参り給ふ。料物どもは所々にくばらせ給ふとて、内、中宮の台盤所には宮の権の大進御使なり。院の台盤所にも奉らせ、御使は少進にて内の大殿にももて参る。打つゞき御百日の定めもあるべしとて、いみじき世のいそぎいひさはぐめり。伊勢の齋宮はあへなかりける御事の後、すなはちは御定めもなく、一昨年ばかり内の女一の宮御うらにあわせ給ひ、去年二度の御祓はて、野の宮にいらせ給えりし。今年伊勢に下らせ給ふなりと聞えしに、此比御母なる帥の局失給ひしかば、御服にてまかでさせ給ひぬ。齋院も去年の夏御卜ありて、内の女二の宮居させ給えり。まこといぬる冬罪ゆるされし島守の人々も、二月にぞ都に参れる。少将をば宰相具して六波羅に参り給ひしに、入道うらなきさまにもてなし給ひ、いそぎ内にも物し給ふべく聞え給ふ。司位ももとのまなるを、宰相も心ゆきて思したり。康頼ははやう入道とか聞えし。双林寺といふ所に住て、まじらひもせず行ひ

をのみしけり。島守なりし程も、老たるは、きゞのある
かなきかの心ぐるしさに、卒都婆をあまた作りて、

さつまがた沖の小島に我はありと

おやには告よ八重の汐風

とかいつけて海に流しけりとぞ。陸月の司召によるこび
と給ふ人々おほくて、春宮の権の大夫もまことの大夫に
あがり給ひにし。是は兼雅とて、花山の院の前のおほき
大殿の御子にいましける。兄弟なる忠親は中宮の権の大
夫と聞えし。右衛門督、非違の別当などかね給ひし。今
年右衛門督をも別当をも退給へば、中宮の大夫なる時
忠、別当に成給ひぬ。殿の上は春宮の御母代の定にてお
はしける。きさらぎ十日内に参らせ給ふ。いとよそほし
くて、春宮大夫、中宮権の大夫など御供に参り給ふ。花
山院の大殿の御女におはすれば、皆御兄弟ぞかし。すな
はち輩の宣旨ありて春宮の御方に渡り給ふ。宮をば御乳
母の洞院の局抱き奉り給える、いとうつくしげにおはし
ますを、めでたう見たてまつり給ふ。中宮にも御対面あ
りて、いたうふけてなんまかで給へり。贈物に後の宮の

御方より琵琶をうるはしき錦の袋に入て出させ給へる、
春宮大夫とりて御前の人に伝へ給ふ。廿二日、宮の御百
日なりける。かねて雑事共定められて、春宮の亮なる重
衡、行事のよし聞えし。大方五十日の御儀式にかはるけ
ぢめなく、市の餅は十五日より末なればとて、西の市に
買なめり。料物、折櫃物など清げに設けられて、上も渡
らせ給ひ、人々もさぶらひて御遊も侍りしとよ。月の末
はなべてよの花盛なりける。殿上の若き君達、大内に行
て南殿の花見給ひ、詩をも講じつゝ、連句など有て、終
日いみじき色香をもてはやし給ふ。内には皇子生れ給ひ
ぬなりと女房達さ、めくは、信隆の修理の大夫の女つか
ふまつりて有けるを、上めやすきものに御らんじける程
に、たゞならぬ事のよし奏してまかで給ひにし。いとた
いらかに男皇子抱出給えりとよ。やがて中宮の御せうと
の知盛の右兵衛督、預りて養ひ奉るべきよし仰言あり。
弥生はじめ、御方違とて院に行幸せさせ給ひける。又十
五日は平野に行幸なる。春深き霞の色に野山も殊におも
しろきおりなれば、松さへ一しほの色増り、百鳥の声も

めづらしうて、上も詠めにあかず思し召るべし。院の若宮御室の御弟子と聞えさせしは、院の御まへ下に思しめす事ありて、内の御子にもなし奉らせ給ひ、まだ御さまも替させ奉り給はず。内に皇子の生れさせ給はぬ限りは、しばし休らはせ給ふやうなりしに、春宮かくゆるぎなくておはしませば、今はの中うしろめたからず思しなりて、卯月御ぐしおろさせ奉れ給えり。十四にぞならせ給ふ。内には又頼定の宰相の女あぜちの典侍、姫宮うみ奉り給へり。今年賀茂の祭につかふまつる人々、宮々の御使まで装束、車共世になきさまにこのみと、のへ、いひしらぬ清らを尽してわたりけるとて、又なき事のよし打かたぶく人々あり。院ももの御覧じけるが、浅ましきまでび、しう、制を破りたるさうぞくどものめづらかなりとて、御けしきあしうせさせ給ひ、俄に人々御かうじあり。近衛使は顯家の少将なり。東宮の御使は権亮惟盛とぞ。此二人はうちくのよせことなるにや、とがめさせ給はず。馬寮の使などはわりなき事に侘あへり。又此年の事とか覚へ侍る。よに浅ましかりしは、院の上御

遊せさせ給ふとて、太政大臣、さりぬべき上達部など参り給ひ、とりくに奏し給ふ物の音すみ渡り、唱歌の殿上人の声いとおもしろくて、院も時々御声加へさせ給ひ、風さへ心有て音やめつ、しめやかなれば、いと、しう遊増らせ給へる程に、高雄寺の文覚といえる聖参りて、よいなくみだりがはしきふるまひつかまつりにければ、院心なしとむつからせたまひ、北面の人々してからめさせ給ひ、伊豆の国に流しつかはされき。是は弥生の比にや侍りけん、あやしうおぼしくくてなむ。小松の大臣は日ごろなやみ給ふと聞えしに、御心地のひまおはしけるにや、三熊野に詣給ふ。御子の殿原、春宮の権亮資盛の少将、清経など、みな御供に参り給へり。されどことしくさまならずやつし給えるしも、君達の御よそひばかりは、何れとなくなつかしう清げに見え給ひぬ。後おとまはまめやかにくるしうし給ふとて、おさく起もあがり給はず。物なども見入れ給はで程へ給ふれば、入道殿もいみじう思しきはぎて、御祈こちたくせさせ給ふ。内にも宮の御百日の折さぶらひ給えるのみに

て、其後たえて参り給はず。弥生表たてまつりて、内大臣も辞し申給ひてし。五月廿五日、年比の本意とてさま替給ひにき。親ある人のそむきぬるもめづらしう、親子ならびて入道の殿と聞ゆる例もまれなりとぞ世には申侍り。さてだにたいらかにおはしましなばと、親族の人々おほいたり。院さへ聞し召驚きて、此こ、ちとぶらはせ給ふとて、忍びて御幸おはします。おとゞいといたうおどろきかしこまり給ふ。かうおもだ、しきにつけてもいよく、おしう悲しく、いかにもしてかけとゞめ奉るわざもがなど、兄弟の殿原もおほしまどはれ給ふ。秋に成ても猶さはやぎ給ふ事もなく、よの中心ほそう思したり。うへ、君達など、心をまどはしてよるひる見奉りあつかひ給ひしに、八月朔日つゝに浅ましうなり給えり。四十に二つぞあまり給へる。いまださかりの程にて御ぐしおろしつるをさへ、たれもくあたらしうおほいたりし。まいていはん方なくこそは。今のよのかしこき人といはれ給ひ、心ばへのなだらかにらうくしう、仕ふる道もまめやかに、人をもよくいたはりて、しるしらぬわかず

なさけくしう物し給ひしかば、内にも院にも惜み聞えさせ給ひ、上人などもなべて口おしう思ひなげき給ふめり。此御陰にかくれたる男女すべて、月日の光り失ひつ、こ、ちして、思ひ歎く事かぎりなし。中宮も御服にいでさせ給えり。北の方、君達などは唯くれまどひておはするもことはりぞかし。御法事など過て十月ばかり、北の方のもとに中宮の右京の大夫、

かきくらす夜の雨にも色かはる

袖のしぐれを思ひこそやれ

返し、北のかた、

おとづる、時雨は袖にあらそひて

なくくあかす夜半ぞかなしき

上は入道ののどめたる心なく、きうに物し給へば、よの政にも折にふれてひがくしうなどあるを、此大臣のよろづにいさめ給ひしによりてなん、何事もなだらかにめやすかりしを、今行さきいかになり行よにやとうしろめたう、やすげなく思し歎かせ給へるもことはりに、さぶらふ人々も見奉る。冬の比、いみじきなるふりて、山も

崩る、ばかりなれば、都の中には人の家どもかたぶきたふる、あり。所々の塔などもそこなはれつ、誠に只今よのつきぬるにこそはと、人々浅ましう思ひまどひたり。五月の比ほひ、辻風のはげしかりしさへたゞならぬさまにあさみあへる人おほかりしに、同じ年にしもかゝる事のあるは物のさとしにこそあらめ、よのなかかゝらむと心あるどちは打かたぶくめり。公にも恐聞えさせ給ひ、御占など行はれつるに、おもき御つゝしみのよし奏すれば、上も院もやすからず思しめさるゝに、六波羅の入道、院の上を恨み奉る事ありなど聞ゆれば、院にもわづらはしう思し召れて、とりわけたる御使ありしに、入道の心なごみつと聞ゆれば、上人達もさりともおだしう思しつれど、よの中は何となう静にもあらぬさまなり。内にも「さればよ」と、いとゞ内の大臣のなきを口おしう思し召れたり。さはいへど、あるべかしき公事などはかはらぬさほうにて、冬のはじめの小除目にかさあがりし人々、此比よるこび聞えにありき給ふ。中にも殿の太郎君師家の中将は、いぬる月の八日、従三位に成

給ひ、九日中納言にて、中将もはなれ給はず。又廿一日、正三位にうつり給えるを、よの人目もあやに思ひて、来し方さらにためしもありがたう見聞えたり。よろこび聞えに内、院などに参り給える折も、いとよほしう引つころはれて、上人達あまた御前つかふまつり給えり。五節の比は内渡りの今めかしさも例の事なれど、天津乙女の舞姿はいつとてもめづらしくやはあらぬ。殿上の淵醉などは若き君達いろゝの姿どもにて打乱れ給へる、いひしらずなまめかしうて、上の女房達いみじき事にすめり。又の夜は君達中宮の御方に参り給へば、こなたにも物見る人々愛まどひたり。上達部さぶらひ給ひて、いとゞしうもてはやし給ふ。かうはへゝしきま、によの中思ふ事なく、上も御心ゆかせ給ふやうなりに、六波羅の入道日比は福原にのみおはしけるが、俄に兵をあまた引具して京に入給ひぬと聞ゆれば、高きもくだれるも人々心をまどはして、いかなることの出まうで来んとするとおぢさはぎたり。かたへは入道天が下を恨み奉りて、中宮を福原にゐて奉らんとて、御迎ひにおは

したりと聞ゆるも空言にはあらぬにや、八条の殿に行啓
 なるとて、御前の人々めさせ給ふ。内も院も御胸つぶれ
 て思し召れき。かうの、しるは霜月十五日ぞかし。十六
 日、入道内に参りて奏し給ふやうや有けん。ゆくりもな
 く大殿のそくをとゞめ奉り、中納言の中将をもつかさを
 とりて、太政大臣資賢の大納言をはじめ、上達部殿上人
 四十人におよびて、御かうじのよしにておしこめられ給
 ひにき。人々は思ひかけず、夢か何ぞとまどひてたゞ物
 にぞあたる。其日、やがて故基実の大臣の御子基通と
 て、二位の中将にてゐ給ふを、内大臣にて関白になし奉
 り、氏の長者など皆入道のはからひ申給ふとぞ。御婿に
 おはすればなる。入道のあながちに宣旨をも申下し給ふ
 めり。又の日、おほき大臣をば尾張の国に遷し奉る。此
 大臣はいみじき琵琶の上手におはしければ、妙音院の大
 臣など申て、昔の頼長の大臣の御子にいましける。十八
 日は前の関白殿、太宰の権の帥に遷させ給ひ、京出給ふ
 なりと聞えし。やがて河尻とかいふ渡りにて御ぐしおろ
 し給ひつとあるも、よをうしと思し召ぬらん。御心のう

ちおしはかられて哀にこそ侍れ。後にうけ給はれば、筑
 紫までは下り給はず、備前の国にとゞまり給えりとな
 ん。按察大納言は子、むまご皆都の外に出され給えり。
 さてもやしづまるとおほゆるに、廿日と申夕つかた、入
 道、宗盛の大納言を法住寺殿に参らせて院をさへ迎え奉
 り、鳥羽殿におしこめ奉る。浅ましともいへばおろかに
 て、殿の流され給えるさへ、おほろけの事にては例もな
 き事なるを、まいて一院のかゝる御事をば、いかゞは内
 にも御心うごかせ給はざらん。上は大方の世、物うくの
 み思し召れたり。入道は大納言を都にすへて、我身は福
 原に帰り給へり。院の上はさらにうつゝ、共思し召れず、
 唯あされさせ給える御さまなりけるが、日比に成ぬる
 まゝ、にいとどうしう浅ましく思し召れて、御涙におぼれて
 のみ過させ給ふ。つかふまつる人も多からず、静憲とい
 える大徳ぞ常にさぶらひ給ふ。女房一、二人など、それ
 も御前にむつまじうつかひならせ給へるをば入道ゆるし
 給はず、すべて入道のもてなし奉り給ふ事とて、其ゆる
 しなきはあからさまにも参りがたきを、院はめざまじう

御らんぜさせ給ふ。思しあまりては、小松の大臣をのみなむあらましかばと、恋しう思し召れたり。いづかたにも此大臣のおはせぬ事をさうくしく、絶ず恋忍び給はぬなし。まいて御子の殿原はまじらひの程もたづきなく、心ばそげなり。内さへよを所せう思しつゝみて、院に御使しげうも見奉らせ給はず。日比だに、ともすれば入道政にも口入給ひしに、今はひたぶるに心にまかせて、はゞかる方なく掟給ひ、上の御心ならぬ事おほく、上達部なども折にふれてはしたなく思し侘つゝ、君も臣も心ゆるびなき世をあぢきなく、すさまじう思されたり。今の関白殿ぞ花やかに時めき給ひ、すなはち職事何くれの司召もあり。朱器ももて参る。公にもつかさ解ぬる人々あまたあれば、其かはりに殿原よろこびし給ふありて、春宮大夫も花山の院はかわり給ひ、後の宮の権の大夫なり給ひ、時忠も権の大夫退て、左兵衛督知盛かはりにはなり給ふ。山の座主も替らせ給ひ、明雲僧正にふたゝび宣旨下りぬ。師走に又小除目ありて、男女つかさ増りける。此折後の宮の権の大夫も定められて、実家と

ぞ聞えし。明ん年は春宮御袴着あるべく、同じ日まなをもめすべきよしにて、かねて事定めあり。此程御ぐしまいとて、博士召て時日とらせ給ひ、御作法めでたくて、内の御乳母の別当の君参りてつかふまつり給ふ。此御ことは、さきくの例はかならず三にならせ給ふ年せさせたまふなるを、来年は御国譲あるべしとて、それにはゞかり給ひ、かくいそがせ給へるなりと、うちくさゝめく人侍りし。今年は大方の世さうくしく暮て、立帰る春は治承も四とかぞへき。春宮には去年よりおほしまうけつる御儀式いかめしうて、睦月廿日御袴奉る。まなをもめさせ給ふ。御傳は左の大殿なり。大夫亮達はさらにもいはず、公卿殿上人引つれて参り給ひ、いとあらまほしう、所々の饗、人々の祿などいつくしうせさせ給えり。賀茂の齋院も宮の御兄弟におはしましける。左近府に居させ給ひつる。いぬる冬、そこにて御袴奉れりとぞ。かねてよの中に聞えごちもしるく、きさらぎには御国譲りの事あり。上は月の始より閑院の殿におはします。宮、後の宮は五条の殿にあさせ給へば、廿一日上

おりさせ給ひて、神宝宮の御方に渡し奉らせ給えり。やがて太上天皇の尊号得させ給ひ、新院など聞えさすも上げなき程の御わか／＼しさにて、宮の無下におさなくおはしませば、さのみいそがせ給ふべき御事にもおはしませぬを、去年よりよの中わづらはしく、院の上ぞ思はずなる御住るなどの御心苦しさに、宝のくらも何にかはと、よろづあいなう思召れて、多くはいそがれさせ給えるなめり。天が下治めさせ給える事十二年ばかりにや、皇子達も数そはせ給ひ、すぎ／＼うつくしうておはしませ給ひ、こたびゆずりをうけさせ給ひ、二の宮は少将の局とて、宮内の大輔義範の女の腹におはします。七条修理の大夫信隆の御女の典侍は三、四の宮もち奉り給えり。桜町の成範の御女は小督の局とてさぶらひ給ひしも、女みやうみ奉れ給ふ。女一の宮は帥の局とて、公重の少将の女にいましき。女三の宮の御母は按察の典侍とて、頼定の宰相の御女とぞ聞え侍る。女一の宮は治承のはじめ、伊せの斎にそなはらせ給ひけるが、去年御母帥殿失給ひければ、御服にて野の宮よりまか

させ給えり。女二の宮も御卜にあはせ給ひ、賀茂の斎とて諸司におはします。上は何れの宮達をも悲しうし奉らせ給へど、中宮やむごとなくて居させ給へば、御方々もうけばりて、女御など聞えさするもなく、みな引忍びたる宮仕人のやうにてなんさぶらひ給ふ。小督の局は取分たる御覚えなりしかど、それさへ中宮をはからせ給ひ、御心のまゝにももてなさせ給はず、女御の宣旨などもなくておはしけるをさへ、六波羅の入道なめげ也と目をそばめ給ひ、折にふれてはしたなくいはけなきふるまひをさへして、君の御心をもなやまし奉り給へば、上もいとゞびんなく思し召る。女君のよろづつゝ、ましう思しむすば、れ給へるさまのらうたげなるを、限りなう哀に御らんじて、容のまほにめでたうおはすれば、えも思しすてがたく忍びさせ給ふにつけても、いとゞあやにくに御心ざし増りて思し召るれば、私ものにて人しれぬ御契浅からず頼め聞えさせ給ふ。か、れど齋院をも、こゝらの宮達の中にすぐれてらうたう見奉らせ給ひ、かう／＼しき方に定まらせ給へるを、かつはうしろめたう、覚束

なく思し召れにけりとぞ。

月の行衛卷の二

安徳天皇

さしつぎは八十一代の君におはします。御諱言仁と申奉り、新院の一の皇子にて、御母中宮平の徳子と申し。さきにも聞えさせし入道太政大臣清盛の御女におはします。此帝、治承二年十一月十二日に生れさせたまひ、同じき十二月坊に居させ給ひ、同じ四年二月廿一日、三にて御父新院の譲をうけさせ給ふ。殿はやがて摂政し給ふ。こたび何事も応徳の古き跡を追はせ給へりとあるは、新院、上、摂政殿いづかたもよろしきためしとて、其おり内、春宮別の所におはしまして、御位譲の事侍りしかばなん、さやうの作法にて、閑院より五条の内裏に神宝渡し奉らせ給ふ。道のほどはるく、と菟道しきて、泰通の中将御剣を取てさきに参り、隆房の中将、璽の御箱とりて後にあり。上達部引つゞき仕ふまつり給ひ、行幸の御有さまにかはらねど、殿原多くもあらず渡らせ給

ふ。路には侍共、武士姿いみじげにて、所々に打むれつゝ、さぶらふ。いひしらずむくつけう、めなれぬ事に君達も思さる。何のよそほしさもなく、みだりがはしくてなむ渡らせ給えり。いぬる年つかさ解ぬる人おほかりしかば、何れの御方にも人すくななるやうにて、打あはぬ御事のみ也。平家の君達あまた物し給へど、よにしられたるゆうそくにもおはせねば、時代の覚えこそ人に立まさりやむごとなく見へ給へ、公事などはいとうゝしうたどられ給ふれば、五条の殿には春宮の大夫のみなん、さる家の君達として、才の方もこよなくおはすれば、唯一人こゝらの事をおきてつかふまつりて、あからさまにもまかです。此程はよるひるつとさぶらひ給ふ。すなはち藏人も召れ、又殿上ゆるさせ給ふ人々、勅授帯剣など摂政殿定め給ふ。坊官の除目も行はる。院に尊号奉り、御隨身参らせ給えるは、さきくゝの例のまゝにや。壺切の御剣は春宮に立せ給ひはじめ、一院より奉らせ給ひしかば、そなたに返し奉れ給ふべけれど、唯今鳥羽殿におはしませば、びんなくて新院の御方に奉らせ

給えり。卯月、御位の事有べしとて、かねて其さだめ有。大極殿はまだ造りあえねば、官の庁に御装束つかふまつるべう申人もあり。又、南殿こそは殿原とりくゝに聞え給ひにし。終に四月廿二日、南殿にて御位に即せ給ふ。撰政殿そひ参らせてあつかひ奉り給ふ。ひたぶるにいとけなうおはしませば、行末の千年も誠にはるかなる御事をぞ、天が下なべてたのもしう思ひ聞えたり。入道殿、二位殿は后になづらふる宣旨にて、年官年爵給はり給ふ。此御代には、平家の人々いとゞしう時の花かざし添て、はへあるさま也。さきくゝは院の御前にてよの政をもした、めさせ給ひしを、今の新院はさやうの方むつかしうせさせ給へば、聞し召もいれず。撰政殿も揚名だちて、よの事はみな六波羅の入道ぞ掟給える。おりゐの上は、一院の浅ましう、かゝる事をも余所に聞し召つるを、絶ず御心ぐるしう思し召るれば、かつは入道の心もやとくると思し召れて、御幸始とてもまづ巖島に詣させ給べく思し立たたまひしを、山などに聞付て心よからずさゝめくなりと聞し召ければ、いとむつかしう所せう思

し召れて、とゞまらせ給えるやうにもてなさせ給ひ、うちくゝ御心やすく仕ふまつる上人ばかりに仰あはされで、御よそひなど調じつるをも深く忍びさせ給へり。弥生に鳥羽殿に御幸ありて、法皇に御対面おはします。かたみにやすげなきよの物うさを、御心ふかきさまに聞え給へり。よの中わづらはしう思し召せば、人の物いひのさがにくきをつ、ましうおほさるゝ物から、御供にもうときはませさせ給はず、こゝろやすき限りにておほくもさぶらはず。上達部五人、殿上人三人などや有けん。殊にやつれさせ給える御さま容はしも、あらまほしうめでたくて、年比にねびまさらせ給ひ、いとゞなまめかしうみへさせ給ふ。物をふかく思ししみて、打しめらせ給える御けはひのたぐひなうおはしますを、法皇もいと哀れにまぼられ給ひては、故女院の御事をさへ思し召出させ給ひ、いみじうしほたれさせ給ふ。新院も此院の御ありさまの、ありし法住寺殿に引替ていとかすかに、参り仕ふまつる人さへおさくなく、つれくゝと行ひなどにて過させ給ひ、いつともなくむもれいたくておはします

を、限りなう哀に御らんじ渡して、唯よ、と泣せ給ふ。御供なる君達も聞えさせやらん方なく、みな袖のみしほり給ふ。新院はしばしもかくておはしまさまほしう、出させ給はん御心地もせさせ給はねど、よの中をところせう思しはかりて、なくく出させ給ふ。一院も今しはともえ聞えさせ給はず。御名残はかたみに尽せずおほし召にも、有つる法住寺殿にて朝觀の行幸などの折の事、御賀のめでたかりし春の空をもおほし出させ給へば、唯夢の御心地せられ給ひ、たとしへなき御住みを恥かしうも悲しうも思しつゞけられて、御涙せきやらん方なうかきくらされ給へり。新院はやがて御船に奉り、御供の人々も淨衣などに改めて、いつくしまにおはします。公には今年、大嘗会もおこなはるゝとて、五月換校の中納言も定めさせたまふ。さりぬべきつかさく、まだきに御まうけ仕ふまつる。此比又入道のはからひ給ふよしにて、一院は八条坊門なる入道の家に御幸おはします。高倉の宮と聞えさすは一院の皇子にて、新院の御はらからに侍り。時にもあはせ給はず、つれくよをおほししづみ

たるやうにて過させ給えるに、源の頼政はつねにこゝろやすくつかふまつりけり。すぐれたる歌よみの数にも入たる人なれば、宮も春の朝、秋の月のよなく御前に召され、題給はせてつかふまつらせなせさせ給ひ、物いひあはせさせ給ふにもつきなからず、めやすきものに御らんじ置つればなむ、ひまなう召まつはさせ給えり。頼政は一年三位してし後、本意かなえるさまにて、程もなかつかさをも返し奉り、かしらおろして今は三位入道とか申しに、いかなりけるにか、世にはけしからぬ事を聞え出つるも、誠そらごとはしらず、いとむくつけう人々思ひたり。故為義が子の行家といえるものを、宮の宣旨の御使にて、国々に居ける源氏の兵を召つゝ、代を傾けん事を思しかまふるは、此頼政なん、同じ心にはからひ申事あんなりといふもまがくしきを、いつしか平家の人々聞付て、まづ宮をこと方に渡し奉らんとて公に奏しつれば、すなはち事の定めあり、土佐の国に遷し奉るべきよしなり。皇子と聞えんはかたじけなして、俄に源氏になし奉り、御名も以仁を以光と改めて仁の字をばと

らせ給ふ。やがて検非違使なる源の兼綱、大夫の尉源の光長、ゆゑしき武士姿なるものあまた具して、御迎ひに参りたり。宮にははやししろしめして、あらぬさまにやつさせ給ひ、夜にまぎれて京を出させ給ひ、三井寺に入給えり。公よりつかはし、御迎ひの兵は、宮に参りてかくといはずれど、宮はおはしませず。内に入て物のくまゝあさり求め奉れど、さらにおはしませねば、すべなくて信連といえる宮の侍をからめて参りたり。又、三井寺の大衆も宮の御方人のよし聞ゆれば、内には山の座主、寺の僧綱達召れて、衆徒共せいし聞ゆべく仰言あり。源三位入道も同じ心なりけりと言事もかくれなうなりしかば、検非違使参ると聞て、入道俄に子供打具し、五十余騎にて宮のおはします三井寺に参り給ふ。宮は法師原の心もうしろめたくや思されけん、しばしにて寺をも出させ給ひ、奈良におはしますんとするほど、まづ宇治におはしつきて平等院にいらせ給ふ。内には八条なる入道の家に行幸ありて、内侍所をも渡し奉り、中宮も行啓なる。かゝれば都の中もおのづから物さはがしきやう

にて、殿原も浅ましう思す。公には平の重衡、惟盛大將にてむかひ給ふべき仰言あり。やがてこの軍共をしたがへ、宮の御跡を追て宇治に参り、河辺に陣し給ふ。三位入道待うけて、かたみに劣らじまけじといどみた、かひけるさまいといみじ。宮の御方には、召につかはしし国々の兵共まだのぼりあへぬ程にて、御勢わづかなりければ終に打負て、三位入道は子供もみな討れ、其身も平等院の釣殿にて自害してうせ給ひぬ。宮をば御馬に奉り、奈良の方に落し奉りにけるが、道の程にていみじき事の侍りぬることいと浅ましう、宮もあへなうならせ給ひつれ。公の兵のいさみ悦びたりしも中々うたてかりしはや。さて後、さきにめしとられし信連も流され侍り。又、公がたの武士どもには實行はせ給えり。宗盛の御子の清宗も、此折加階し給ひぬ。やう／＼よの中しづまりぬるやうなりしに、暑き比ほひ都遷しとて、福原に内裏作りて京になし聞ゆべしとぞ、入道のさだめとて、めづらかなる事に人申あへり。古へは帝のかはらせ給ふごとくに都をも遷され侍れど、近き世には絶て音にも聞えず。

殊に桓武天皇のさばかりうるはしき御心にて、万代までも動きなきさまにと思し召置せ給える御事を、わきて其流を伝へつる身として、おぼろげに昔の御掟をもてたがへ給える入道の心を、人しもこそあれと心あるどちはつまはじきせられて、浅ましと思えり。たかきもくだれるも人々皆出たつとて、調度ども運び渡しなどする程、いひしらずらがはしくて、心もえぬ京わらべ共はあきれまどひ、泣かなしみつるさまあはたゞしきまでなり。水無月二日、行幸とて都を出させ給ひ、寺江の行宮につかせ給ひ、又の日福原に入らせ給ふ。一院、新院も同じやうに御幸おはし、中宮の行啓もあり。か、れば摂政殿より末、上達部、殿上人、五位六位などまで心にもあらぬ家移りを、なべて此比はいとなみにはしけり。さるは難波の古言も思ひ出られて、今は都とそなはりつるよと見るにも、さらに皇の都卜給ふべきわたりともなく、所もいとせばくて、有つかぬ住るに侘あえる人々は古き都のみ恋しう、すべなくおぼいたり。入道は諸国の受領共して大内裏つくらすべく思して、さりぬべきゆうそく

の殿原、弁史などにいひあはせ給へば、人々定め聞えんとて見ありくに、ゆほびかならぬ所にて、二条三条などの大路もことごとくは分ちがたく、左京だにまたからねば、右京はすべてなしとあれば、さらばとて里内裏になりぬるに、それさへ打あはず、ことそぎたるさまなり。入道天が下を心にまかせ給えるあまり、都をさへ遷し給えるは、物狂はしきまで国民のつかる、歎きはかけても思ひやり給はず、はた此比はありつる頼政の乱れめざましかりしを思ひて、国々にありける源氏の武士どもをば残りなふ尋ねあさりて失ひてんとおぼいたるを、伝へ聞えはの心得るかたもや有けらし。うちくかまふる事ある人々も、遠き国々にはありと聞ゆるにぞ、さればよとやすからず、下に歎く人も侍りとなん。秋に成行まに、あたらしき都の有さまもたゞならず、賑は、しくめでたかりぬべき事は露なくて、すゞろに物がなしう、夕べの空もいとゞ身に入て覚え給ひつゝ、まだ住馴ぬ人々の心共には、何となうさうくしく、旅心地のみして、うらさびしき秋風の夕暮、初雁の鳴わたる暁などはさら

なり、生田の奥の鹿の声にも怪しう、鱧の鱗思ひ出らる、やうなるを、ことたがひて思すめり。月の比は若き殿原いひあはせて、一葉の舟に棹さしつゝ、近き浦々の月など見給ふもさすがにおかしうおぼされき。実定の大將はめづらしき所の月よりも、なれし古郷の忘れがたくて、内に御いとま聞え給ひ、忍びておはしたり。いつしか人々の住捨たりし跡は野らとなりて、虫のみ所えがほに鳴乱れたる、いと哀なり。猶残りみける人の家ども爰かしこにあれど、人のけはひなどもせずかすかなり。いくほどならねど、いたく打荒にけるこゝちして見渡し給ふ。賀茂河の流、八幡山の姿のみなん、有しにかはらぬも哀にて、「門前改めず」とまづ覚え給ひ、「ふりにし久邇の都にも」など、返すゝ思ひ出られ給ふ。大后の宮猶爰に残り居させ給へばとぶらひ聞え給ふ。さし入給えるまゝに、庭も籬も秋の千種の花のみ咲乱れ、払ふ共なき道の露は、誰ためにか白玉敷渡しつれど、ふみ分たる跡もなし。「大宮人の移り居ぬれば」と思すまゝに、「深き蓬の」とて、そことしもなき三の道をたどりつゝ、

「黄菊猶存」と忍びやかに独ごちて見めぐらし給ふ。人影もたえゝに、物さびしげなる御有さまの心苦しう、思ひ出る事多くて涙ぐまれ給えり。こなたにさぶらふ小侍従の君は、容もこともなく心ばせありて、歌などもゆへづきたるふし読^よ出て、人にも心にくきもの思はれける。大將もとより見はなたぬものにおほいて、時々かよひ給ひける。今日もまづそなたに音信給ふ。女もめづらしう見奉りて、御前のありさまなごきこゆ。大将此人して御消息聞え給へば、宮「こなたに」との給はず。やがてまいりて御簾の前にさぶらひ給ひ、日比の覚束なきなど聞え給ふ。宮もなつかしげに昔今の御物語をさせ給へり。此宮と申は、よの人二代の後など申し御事にて、故公能の大臣の御女におはしまし、近衛の御時内に参らせ給ひしかど、帝はやう隠れさせ給えりし後は、よをうき物に思し召れ、御行ひなどせさせ給ひしに、又二条の院のわりなき御心にて、父大殿にもせちに聞えさせ給へば、遁れがたくおほいたるを、宮いと有まじう、はづかしき事に思し召れて、御文などあるにも御返りだに奉ら

せ給はず。まいて参らせ給はん事はけざやかに思したえつるを、帝あやにくに恨み侘させ給ひけるにぞ、終に二度内に入らせ給ひにき。院に聞し召て、ことに例しもなぐめづらかなりとてむつからせ給ひ、上達部などもよの音聞もやさしからず思ひなやみ給ひしに、上は唐土のためしをなん引せ給ひ、人のいさめにもしたがはせ給はず、はゞかる方なき御もてなしにて、もて出て后にすへ奉らせ給ひ、いみじき御思ひなりけるに、其帝さへなかくもおはしまさゞりければ、宮はかへすゞ人わらへなるよを所せう、「物にもがなや」と思し歎かせ給ひ、其後は浮世の事聞し召入べくもなく、ひたみにち御行ひがちにておはします。何れの帝の御時も皇子の生れさせ給はざりしをなん、宮人共もくちおしき事にし侍りし。近衛の院の御時は、故頼長の大臣の御子にならせ給ひて参り給ひしぞかし。されど誠の御筋は徳大寺におはすれば、大将は御兄にて、父の大殿失給ひしこなたは、たのもし人にて御後見つかふまつり給えり。大将はしばしさぶらひて立給へるまゝに、小侍従の君のもとにとまり給

ひぬ。かくわざとまうで給へるも、多くは此人によりてなれば、浅からぬさまに語らひ給ふ。逢しあへばといふめる秋の夜の、げにいとく明ぬる心地して、暁の別も常より身に入て覚え給へば、かたみに袖のみ露けて休らはれ給へど、明果なんもはしたなくて、なくく出給へり。女もことにいみじき朝けの姿を遙に見送りてたり。大将もあかずのみおほいてかえり見がちなるを、御供なる経尹、あはれに心ぐるしう見参らせけるが、立かへり女の打ながめてある所によりて、

物かとはと君がいひけん言の葉の

けさしもなどか恋しかるらん

是は大将の通ひ給ふ比、いつの時にか小侍従、

待宵に更行鐘の声きけは

あかぬ別の鳥は物かは

と読(マ)たりけるを思ひ出でなんきこえけるなめり。いみじうもつかふまつりけるとて、大将ことにほめ給えりしとて、大将はた優なる歌人におはすれば、かうやうの事につけても心とまりて、故郷の見すてがたさもせん方なき

までなれど、御いとまの日かずもあれば、心にもあらで又今の京に帰り給ふ。若き君達のこよなき事にめでまどひし須磨、明石の月の詠をばさし置いて、はるくくと物淋しき浅茅生の陰を分つ、「いかですむらん」といふばかりの月をもてはやし給える大将の心深きを、たぐひなうもおはしけりと、時の人やさしき方にはまづ聞え侍りしよ。都遷しの後は大方の世長閑にもあらで、入道の心のおそろしさに、色にこそ出ね、やすげなう歎き渡りつ、神仏に仕ふる人々はよの中なをりなん事を、おきふし祈り申のみなりし。此比大中臣為定、伊勢に参りておほん神の御前にて君の御祈り仕ふまつりけるが、月のころ読侍りし。

月読の神してらさば天雲の

か、るうき世も晴ざらめやは

源の頼朝とて伊豆の国の流木なりしものは、平治に亡びにける義朝の子なりしが、此ころ軍をおこして其国の目代なる平の兼隆を討とりて、やがて伊豆の国をも出つ、日に添ていきほひ増りにければ、いつしか関の東

の国民をなびかせたりとて、福原に物の聞えあり。入道やすからずおほいて公に奏し給ひ、官軍をつかはして討しむべくおきて給ふ。少将惟盛、三河守知度、薩摩守忠度おのゝ討手の使にて、平家の侍共、さらぬ軍もかずゝに従えて、長月十日あまりあづまに下り給ふ。此乱れによりて関の東の国々の貢物は絶てもて参らぬを、おほやけにもめざましうおほし召るゝに、又世には富士のすそ野のわたりに戦ひありて官軍うちまけつ、人々逃て伊勢の国に至れりと聞ゆるも、よに誠しうあらじとおほゆれど、入道もいかならんとはさすがに思したり。討手人達は富士河につきて陣すへ給えるに、源氏の軍そこばくなるよしにて、そこらの国々みな心をかはしけりと聞ゆれば、こなたはさのみ兵も多からねば堪べくも見えず、いかにせましとためらふ程に、源氏の軍共陣の後をふさがんとかまふるよし聞ゆるにぞ、いよゝうしろめたくて、けしきばかりの戦ひもなくある限り引退きたり。霜月はじめ、大將軍なる惟盛の少将は、従ふ兵わづかにてもとの京なる六波羅におはしつきたり。こと人々

もとりくゝに逃てのぼるとて、忠度、知度、貞俊、忠綱などは三河の国にとゞまり、忠景は伊勢の国より京に入る。福原には入道をはじめ誰もくゝあさましう、ねたき事限りなく、討手の人々をさへいふかひなしと心づきなう思ひ聞え給ふ。猶かくてやむべきかはとて、又々さし加へてつかはすべきさだめありて、頼盛の中納言、教盛の宰相むかひ給ふなりと聞ゆれど、まづ清綱、定安などの武士を陸より下し給ひ、又筑紫の兵を舟にてつかはすべく仰言ありきといへど、まめごとにもあらぬにや、いそぎたつとしもなくたゆたふやうなり。山には座主の僧正、東の仇共ほろびぬべき御祈に、いみじき法行ひ給ふを、衆徒はやくなしとろうじておのくゝいひあはせつゝ、古き都に還らせ給ふべく公に訴へ申めり。かやうのまぎれにや、大嘗会などは音もなくなりて、新嘗会ももとの京なる神祇官にて行はれて、五節も例のさまなれど、東の乱れによるづつゝ、しませ給ふとて、さのみはへくゝしうもあらず、節会に参り給ふ殿原さへおほくも侍らざりき。此いそぎ過つれば、またもとの京にかへらせ

給ふとて、上まづ御首途せさせ給ひ、土御門の大納言の家に入らせ給ふ。廿三日、やがてそこより行幸おはしまし、廿六日京に入らせ給ひ、五条洞院の殿を内裏にて渡らせ給ふ。新院は日比あつしうのみせさせ給ふとて、此折も御乳母の別当三位仕ふまつり給ひ、御車にて御幸おはします。やがて池殿とて、頼盛の中納言の家に入らせ給ふ。一院は御輿にて入道の家なる六波羅の泉殿に渡らせ給ふ。此御前は去年法住寺殿を出させ給ひし後は、何所にてものはれくゝしからぬ御住みに思し結ば、れてのみ過させ給える。人々哀に見奉れど、入道は高倉の宮の御事をさへ、此御前のしろしめしたらんやうに心づきなう思ひて、いよくゝ心置奉り給へば、仕ふまつる人もありしまゝにて、こと人はさらぬゆるし給はずなん。こたびの都遷しは山の訴へ、東の乱れなどによりてなりと聞ゆれば、大衆はかひ有て覚ゆるに、殿原さへ心ゆきたる事にていそぎ渡り給ふ。平家の人々だに残り給はず、みなかへり給えり。たかきもくだれるも、住馴し古郷のなつかしさに、いとうれしき事にしけり。今は長閑に春のい

そぎをこそなどいへど、公には東さまの事を、殿も大臣達もうしろめたう思しやれば、新院も御心苦しう思し召れて、人々御前に召せ給ひ、さりぬべき祈の事など仰あはさせ給ふ。官の序にて仁王会行はるゝとて、檢校行事をも定められ、又陣には御守り怠るまじう、衛府の人々におほせ言あり。六波羅の入道もさこそ心つよがり給へ、近江路のわたりまで軍おこりてみだりがはしきよし聞て、すべなく思せば、ひたぶる心もすこしはなごみにけるにや、去年つかさとけぬる人々もかつゝゆるされ給ふやうなり。前の関白大臣も京に帰り給ふべきせんじ有て、召につかはしつれば、其方さまの人々いみじよろこび給ふ。花山の院のおほき大臣、北の政所の御親におはすれば、殊更に近きゆかりとて、去年のさはがれの折より門もとちて引籠り給へど、御かうじにはあらねば、関白殿帰らせ給ふと聞て、すなはち開かれき。殿の文書ども、公の御さたにて、こなたにあづかり置給ひし、此ころ返し参らせ給へり。殿はうきにしづみ給ひし涙の河の、はやくもうれしき瀬にながれよりけりと思す

も、中々夢のやうにてなむたどられ給ふ。めづらしう見奉る人々は、御容のことなるをほいなく口おしう思ひ聞え給ふ。法皇は新院にさへ御対面のたはやすからぬを、いぶせう思し召るゝがたじけなしとて、ひとつ所におはしますべう入道聞え給ふを、いづ方にもよろこばせ給ひ、やがて新院のおはします池殿に渡らせ給ふ。仕ふまつる人も定能の宰相、資時の少将など二、三人、入道のゆるし給へりとて参り加はり給ふ。法皇は前の関白殿の事をも、あらまほしううれしき事にせさせ給ひき。公には師走又、左兵衛督知盛を討手使にて、馱の鈴賜はせ、近江路より駿河の国にむかふべくさだめさせ給ふ。近江の軍には山寺などの法師原心をかはしけりと聞ゆれば、平家の兵どもゆきむかひて、たちまちに法師原打まけにしかば、淡路守清房、三井寺の僧房ことゝく焼失ひて、金堂ばかり残りぬる事の哀に、こゝら年経つる御法の場の、時の間に春の野の心地し侍るこそ、よに浅ましうは見給ひつれ。京には上達部、受領などの人々に兵を参らすべく仰言ありて、陣の守りも殊にきびしう、祭の

折のさまにはあらず、衛府のつかさどもうとましき夷の
きぬにて、夜る昼つとさぶらひて、くらうなれば「た
ぞ」と咎むるも例の事なれど、思ひなしむくつけう侍り
にし。かうて今年は暮ぬめりとおぼゆるに、またいみじ
う侍りし事は、六波羅の入道、御子の頭中将重衡を奈良
の京につかはし給ひ、衆徒共の高倉の宮にこゝろよせ奉
りし怠りをとがめ給ふ。頭中将奈良坂にうち向ひ給ふ
に、大衆きびしうふせぎて戦ひこはかりしかど、終に破
られて、法師原山階寺に籠りしかば、やがて平家の兵ど
も火をさしつればなん、衆徒もせんかたなく逃まどひ
て、命を失ふもおほく、さしもいみじう造りみが、れし
大仏も煙のまよひにそこなはれ給える、いと浅ましう、
平家の人々の後のよの罪も恐ろしう、三井寺の焼ぬるだ
にあるを、それは金堂残りしぞかし。爰は東大寺も興福
寺も御堂く残りなくて、東大寺の御仏は聖武の帝の御
願ひにて作られたりし。其のちおほくの年を経て、また
かゝる事はなかりしとよ。興福寺は淡海公の建給えりと
て、藤氏の殿原殊にたふとみ給ひ、公にもおぼろけなら

ず思し置せ給えりしに、衆徒の心おさなさにかゝる事も
有けりとはいえど、さしあたりては平家の人々のようい
なきに聞えなして、心あるも心なきも、よのちいかゞあ
らんと打なげきたり。まして藤氏の君達などは、やすか
らず下にはなやみ給ふめれど、入道のひたぶる心のわづ
らはしさも知り給へば、ことに出てもの給はぬさへいと
おしうぞ侍りにし。年も帰りぬ。朔日にも藤氏の君達は
山階寺の焼ぬるによりてこもりおはしつれば、内に参り
給ふ人も多からず、御節会もかたばかりにて、奈良の火
の事には、からせ給ひ、雅楽つかさもめさず国栖の奏も
なし。春の始の御儀式のうるはしからぬを、ゆゑしき事
に思ふ人も有となん。新院いぬる年より例ならずおはし
まして、物なども御らんじいれず、臥がちに物せさせ給
ふとて、中宮も御心苦しう見奉らせ給ひ、さまゝの御
祈せさせ給ふ。去年の冬も禎喜僧正仰言うけ給はり、東
寺にて孔雀経の法行ひ給ひ、さらぬ所々にても験ある僧
綱達とりゝに仕ふまつり給ふ事絶間もなけれど、更に
しるしもおはしまさず。そこそ苦しげにもせさせ給はね

ど、いといたうやせほそらせ給ひ、日にそえてよはらせ給ふやうにて、春に成てはいよゝ頼みすくなう見えさせ給ふを、内にも宮にも思し歎く事限りなくて、御修法などはさらにもいはず、神の社、仏の御寺に御祈の使ひまなう立させ給ふ。上達部、上人達も心をまどはしてつとさぶらひ給ひ、見奉りあつかひ給ふさまおろかならず。中宮もそひてさぶらはせ給ひ、よるひる御心つくさせ給ふ。ちかう仕ふまつる女房達も見奉りなやみて、御薬何やかやとまめやかなれど、すべてかひなき御さまにて、睦月十四日御気色かはるとて、よの中ゆすりみちたり。摂政殿、左右の大臣、こゝらの殿原みな池殿につどひ参り給ふ。平家の君達も足を空にてまどひ給ふ。山の座主、何くれの僧達心をおこして加持参りさはぐ。爰かしこの御幣使、御誦経の御使の五位六位などは、寮の御馬にて走りまどひつゝ、いみじげにのゝしりつるに、つゝるに其しるしなくて、春の雪にきそはせ給ふばかりはかなう消入らせ給ひぬ。浅ましなどいえばおろかにて、誠に照日の暮し心地に、院のうちの男女とよみて泣まど

ひたり。中宮の思し入たる御さまもことわりなるに、一院の御心のうちおしはかり奉るもかたじけなう、さらにだにたとふべき方なうおほしまどひて臥まろばせ給ふ。皇子達の御中に、とりわけかなしうし奉らせ給ひしに、限りある御身どもにて、御対面などのたはやすからぬをさへいぶせう、堪がたき事にせさせ給ひ、近き比より同じ所におはしまして、覚束なきの御恨みも残らず、かたみに御むねあきて、はかなしごとをもまめ言をも隔なう聞えかはさせ給ふるにこそ、いちはやきよのうれはしさも、すこしはなぐさませ給ひつれ、それさへ幾日もあらでかく浅ましき御事を、さらにうつゝ、共覚えさせ給はず、夢かとのみまどはれ給えり。同じ帝と聞ゆれど、御心ばへの殊に有がたう物せさせ給ひ、民を育ませ給ふ御心のあまねさは、昔の聖の帝のためしに劣らせ給はず、山かぜの寒き夜は、片田舎の賤の住家をはるかに思しめしやらせ給ひ、竈のけぶりの立そふ朝は、国民の豊なるをよろこばせ給ひ、人をあはれませ給ふ御心ふかうおはしませば、男も女もつかふまつり、かくて万代とのみ祈

り聞えさせしに、思ひの外なる御事のいとあへなく、御本性のあまり成までなよびやかにらうくじうおはしまして、入道の心のまゝにふるまひて、世の政などの打ほ、ゆがむ事の多きを、常に御心苦しう思しなやみて、下に歎かせ給ひけるに、一院の思はずなる御住るにくづしいたく詠侘させたまひしを御らんじせしより、いと、しう結ば、れさせ給ひ、いみじき御物おもひのつもりぬるまゝに、いつとなく御病がちに、はれくしからずおはし、事のかたじけなきこと、御心しるどちは限りなう悲しう思ひ聞えけり。六にて東宮に立せ給ひ、八にて御位に即せ給ひ、廿年にて去年下居させたまへば、今年は廿一におはします。盛の御世を譲らせ給ひ、院と聞ゆるだにあかず口おしう人々思えりしに、いとまあはた、しういそがせ給える御事を、返すくあたらしう、末の代にはあまるばかりの御心のめでたさを、天が下こそぞりておしみ奉らぬなし。まいて年比なれつかふまつりし君達は哀に心ばそう、より所なくおぼいためり。なくく清閑寺にゐて奉る。御送りの人々のいみじげなる物を上

に着たるなり。ともは見るに目もくる、わざにて、女房達は心おさめたるもなく、声をも忍びあえず泣たる、ことわりなりかし。「御幸かなしき」と西行上人の言の葉もさらに思ひ出らる、折に侍りしか、中宮にばめる御ぞ奉るも夢の心地せさせ給ふ。内のまだ何事も思召入れぬ御程のうしろめたう思さるゝにつけても、こと御腹の宮々達いときなき御服すがたを、哀に御心苦しう思ひやり奉らせ給ふ。内も諒闇とておろしこめられて、上人などもなべて曇らはしき椎柴の袖は、春の色もなく物哀なり。此程三条の入道左の大臣、梅を折て実守の中納言のがりつかはし給ふとて、

いかでかく憂世をしらで梅の花
今年もおなじ色に咲らん

花鳥の色音も、今年は徒に物うく詠給ふ所おほくて、よの中かいしめりたるさまなれど、国々には公にそむき奉り、軍をおこすよし、ひまなく京に聞ゆれば、平家の人々は絶ずさやうの方にかつらひ、入道もしづかならぬ世を思ひ侘て、一院をもはしたなくもてなし奉らむはあ

しかりけりとおほいて、又有しにかはらず政をもいろはせ給ふべう啓し給えり。今年は二月二ありときこゆれば、春の日数おほく、人の心もわきてのどやかなるべきに、さはなくて、睦月より怪しうさうくしげなりし。後のきさらぎには、六波羅の入道さへ俄に病ひして失給ひき。六十四にいましけり。いみじき宿世ものしつる人にて、子、むま子と所せうさしならべて見る事はさらにもいはず、中宮の御親にて当代の祖父にいまし、上なき位をきはめ給ふのみか、后になづらふる御定めをやむごとなく、よを心にまかせてまつりごち、露ばかり心にかなはぬ事なく、帝はかはらせ給へれど、いづれの御時にもはゞかる方なうもてなし給ひ、たぐひなき幸人なりといわれ給ひしかど、末の露、もとの雫の常なき風にはえ遁れ給はず、春の夜のはかなき夢に見なされ給へる、げに盛者必衰なども今さらの事のやうにて、二位殿、君達は明ぬ夜の闇にまどひ給えり。殊に東路、越路なども静ならぬに、又西の国、南の海も波風立さわぎぬと告たりければ、平家の人々折しもあれ、よの中のをやすからぬ歎

きをさへとりあつめて、心苦しう思す事限りなし。今は宗盛ぞよの事をした、め給ふとて、一院のはれくしからぬ御住るもかたじけなしと見奉り給ふにや、法住寺殿に御幸なし奉れ給えり。猶殿原は入道の忌の程も、やすき空なく弓箭の道に下立つ、法事をさへ過し給はで、重衡は関の東に打出給ふと聞えしかど、いかめしき戦ひなどもなくて源氏逃ちりしかば、やがてのほり給ひし。勝得つとて兵共したりがほにほこりありき侍りしはや。中宮は霞の衣立かさねさせ給ひ、鶯の百轉りも聞いとはしう、御涙のつまに思し召る。何方にも花の盛さへすさまじう、げに墨染にもさかせまほしく、心とゞめてもてはやし給ふ人もなく、春の光の長閑なる折だにしづ心なく散行めるを、まいてあらましき風にまかせたるは、おしみとゞむべくもあらぬが哀にて、よの中の常なきにもまづよそへられたり。邦綱の大納言も病ひおもくなりて、つかさもかえし奉り、かしらおろし給ひにし。やがてなくなり給ひしとぞ。是も平家にしたしうおはしければ、入道何事をも聞えあはせ給ひ、うちくは公の御後

見のやうにおもむけ給へしかばなん、いみじき時の人にて、心ばへあらまほしう、よの為かひくしう物し給ひしとて、内にも惜ませ給ふ。御女達は故院の御乳母、別当三位をはじめ、中宮、内などの御乳母達にてさぶらひ給へば、ことによせおもくこそは侍りつれ、かゝるにつけても故院の御事を忘るゝよなく、何れの殿原も恋忍び奉り給ふ。花の散を見て誰とかや、

散残る花だにあるを君がなど

此春ばかりとまらざりけん

此後の撰集には、土御門の内の大官となん侍るよしうけ給はりし。故院は御葬りの比、御諡奉らせ給ひ、高倉の院となん聞えさせ侍る。公にはくくの乱れのことなく治りぬべき御祈とて、所々にて尊勝陀羅尼、不動明王の御容など書写し奉るべう仰言ありしに、又人々の失行をさへ、物のさとしにやとおぢ聞えさせ給ひ、さやうの御祈のためにや、東大寺、興福寺いそぎ造らすべう宣旨下させ給ひき。上の御位の後、年の号も改るとて、去年師走さやうの御定め有と聞えしかど、博士ども古きため

しを考へ出て、「御即位の同じ年改させ給ふ事は、古き跡多くも侍らず」と奏しけるにぞ、しばし音もなくて、今年文月さきの御代の治承は止めて、養和になさせ給ふ。こたびの文字は敦周なん奉り侍りしとよ。年の号もかはりぬれば、ことなをりて、天が下やすらかならんと国民共よろこびあひつるに、いとゞしううれはしき事多く、秋になりては飯飢とか世に浅ましう、田子の刈積稲とほしくて、賤の住みの堪がたう侘しきはさらなり、つかさある人々、名ある僧綱達たづきなくまどひてつかれ臥つゝ、来し方ためしもなきまでなるを、一院も撰政殿も御心苦しう、すべなく思し召れたり。冬の比、中宮も院号えさせ給ひ、建礼門院と申き。斎宮も此御代にはまだ居させ給はず、斎院も院の御服にておりさせ給へり。いづちも御かはりなるべき姫宮おはしまさぬなめり。内には御禊なども去年ありぬべきを、都遷しの後かしこにては行ひがたきよし人々申しかは、さてのびぬるに、今年は院の御事にて又音もなくなりぬ。長月、兵の乱れにより御祈あるとて、遠き昔の跡を尋ねさせ給ひ、伊せの

おほん神にこがねの鎧を奉らせ給へる。御使は神祇のつかさなる定隆なりける。伊勢に下りし道の程にてあへなくなりにしかば、こと人かはりてなん神垣には参侍る。京には誰もくゆ、しき事におほいたるに、神無月、日吉の社にても同じ祈とて五壇の法行はれ侍りにし。覚管法印を阿闍梨に召れしに、仕ふまつりもはず、俄に心地おこたりて失給えりと聞ゆるも浅ましう、仏神のうけひかせ給はぬにやとかたく心ぼそきよを、殿も大臣達もいかならんと、うしろめたう思すめり。はやう東の討手使なりし知盛もかへりのほり給ひしかば、又陸奥の守、越後の守などに宣旨下りて、東路越路の乱れしづむべうおもむけさせ給ひしに、越後の守はかしこまりて従ひ奉れど、陸奥はいかゞありけん、覚束なきやうなり。さらぬ所々、西の国、南の海もみだりがはしうなりぬれば、平家には人々こ、かしこの討手使に出立給ひ、むくつけき姿共して弓箭の道にのみたづさひつ、心のいとまなげなり。いつしか年も暮なんとす。追儼の夜は上の稚なうおはしませば、殿上人ふり鼓などとして参らする

を、めづらしき事に興せさせ給ふ。「画袴朱衣四隊行」と唐の歌にもいひ置し夜とて、雲井の庭の御有さまは日の光ばかりの火影明らか、なやらふ声々も一年の余波を告わたれるにこそと聞は、さすがに哀れなりかし。次の年は故院の御思ひの程にて、節会も行はれず、霰走もとゞめられて、睦月とて何のはへくしさまなく、院の御はてにてさへあれば、いとゞ物がなしう、宮の中かいしめりたるに、十七日大祓ありて、人々御服ぬぎたりし。二月は六波羅の入道の一廻行なり。女院はさまく御歎きの立帰りぬる心地せられ給ひ、「今日ぞ御祓の」と思し召る、にも、御袖のみしほれさせ給ふ。大宮人の花の衣にたちかへたるは、はれくしき春の色にて、さはいえど都の中は長閑なるに、遠つ国には猶戦ひの声絶ずなどぞ聞え侍る。義仲とて頼朝の同じ筋なりける、是も去年より北の国に起りて、いつしか勢ひ猛になれり。木曾路の方に忍びて年比ありしかば、とくさ刈麻衣の賤しきさまなりしも、日にそえて剣の光りみがきしより、後には大將軍など申侍り。京には国々の乱れぬるよしも

しばし聞えきにければ、御祈何くれと、公にもしづちなうおぼさる、やうなれど、風の音にのみ聞渡り、天飛雁のはるかに思ひやるほどは、殿も大臣達もさすがによの大事ともおぼいたらずおだしうて、近衛外の衛の守もさのみはにて、師走の比陣解つ、春のけはひは例にかはらぬうら、かげさに、すこしは心ゆるびもせられたり。たゞ平家の殿原ぞ、たゆみなくあつかはしげにて、つゝめでよき国々の受領共に、ほろぼすべういひやりなどし給ふ。此人々も年比おさまりたる世にならひて、家の風吹つたへたる弓箭の道をば、中々はるかにのみ思ひつ、心にもいれず、高き雲井の交りに歌をも口とくいひなれ、糸竹の音をも身に入て翫び、ゆうなる方にす、みて、武士めきお、しきわざはありつかず、すべてらう／＼じうのみもてなして、司位などのまさらん事をねがはしうし給ふればなむ、とり／＼やむごとなくなりのほりて、上達部、殿上人いとおほく、池の大納言、門脇の中納言、知盛も新中納言と聞えさせ、参議にては経盛居給ふ。重衡も惟盛も三位中将になり給ひ、資盛、清経も

左の中将なり。宗盛の大納言の御子なる清宗の侍従と道盛とは三位にや。又国々の守なるもあまたあり。此一ぞうの榮へ給ふる事は、始にも申つれど、当代はうち／＼のよせことなるものから、いとゞ時めかしう、目驚かる、までに侍り。此程なをよるこび加へて、撰政殿、内大臣のかせ給ひし御かはりに、宗盛の大納言宣旨かうぶり給ひ、内大臣に成給へり。一院は法住寺殿に還らせ給ひにしこなた、さき／＼にかはらず御幸も御心にまかせてあらまほしき御有さまを、よの人めやすく見奉る。故院の御事につけてもいよく功德の方にす、ませ給ひ、御経供養など絶ず思しいとなませ給ふ。今年は釈迦如来の光り隠れ給ひてより二千百卅五年にあたりとて、鶴の林の昔をはるかに仰て、法の会行ふ寺々もありきとぞ。卯月の事にや侍りけん。日吉の社にいみじき法の菴をのべけりと聞し召て、院の上御幸おはします。舞をもめでたう調へて、いと尊きさまなれば、院も御涙とゞめがたうせさせ給ひける。此折、やがて山にもものぼらせ給ひ、所々拝ませ給へる程、京にはいかなるにかけしから

ぬ事を聞え出て、山の大家平家にそむきて、院の上を迎
え奉り、軍をおこし、今たゞいま責来るなりとて、人々
俄にあはてまどひたり。内にはよに誠ならじと殿もの給
ひ、平家の君達信じがたくはし給へど、さすがにうしろ
めたき方もありて、重衡の中將兵共をしたがへ、御迎に
参り給ひ、事のよし啓すれば、院驚かせ給ひ、いそぎ還
らせ給ふ。かくて後は人の物いひの怪しきに、御幸も所
せう思し召れにき。五月より年の号も又改まりて、寿永
にぞ成侍る。十月御禊ありて、十一月大嘗会行はせ給
ふ。去年一昨年さはり有て、御位の後かく年を隔たる例
も多からず。昔は水無月比までに御即位あれば、其同じ
年に行はるゝとか聞え侍りき。悠紀は近江の国野洲郡な
り。主基は丹波の国水上郡とかや。御屏風は朝方の中納
言、伊経と二人してかき給えり。主基の神楽歌は兼光の
中納言つかふまつり給ふ。神南備山、

みしまゆふかたにとりかけ神南備の

山のさかきをかざしにぞする

同じ稻杵歌長田の村、同じ中納言、

神代より今日の為とや八束穂に

長田のいねのしなひそむらん

此歌は元暦の折のよし増鏡に見え侍るを、いぶかしげに
聞ゆる人侍れば、又こゝにも申なり。撰集には寿永とて
なん入侍るとぞ。次の春は二月、法住寺殿に朝観の行幸
をせさせ給ふ。院も久しう御らんぜざりし程に、上のこ
よなうおよすけさせ給ひ、拝し奉り給へる御容のめでた
うゆゝしきまでにおはしますを、うつくしう見奉らせ給
ひ、故院の御事をさへ思し召出させ給へば、事忌もしあ
へさせ給はぬ御けしきを、おとなしき上達部などはいと
哀に見奉り給えり。御贈物心ことにてあり。院司どもの
加階など、故院の折のまゝなり。誠妙音院と聞えしおほ
き大臣は、物うかりし事の折、御ぐしおろしてし。其後
ゆるされて京に帰り給ひしかど、浮世の事はひたぶるに
思ひはなれて、仏の道をのみ行ひ給ひける。此比東山に
妙音堂作りて供養し給ひける。院もいとめでたき事にせ
させ給ひ、忍びて御幸おはしまし、さりぬべき庄をもよ
せさせ給へり。今年又、内の大臣は従一位にあらり給

ひ、内大臣をば返し奉り給ふ。御かほりの大臣には実定の大將なり給ひぬ。此比都の外はいよゝゝ乱れ増れりと聞ゆれば、卯月には惟盛の中將をはじめ、平家の殿原十萬の軍を帥て義伸を討んとて、越路に向ひ給へり。去年も道盛の中將下り給ひしかど、はかゝしからで帰り給ひにし。五月、そなたさまに戦ひ始めたりとて、大方都の中も静ならず、所々に幣使も立らるめり。山々寺々に御祈かずゝにつかふまつらせ給へり。越路よりは使ひまなう通ひ参るに、心ゆるびせらる、折もあり。又胸つぶる、事もありて、京に居給ふ平家の殿原も北の空を望みてしづ心もなうおほいたり。はじめは官軍まさりなるよし聞えしが、終にうちまけつとて、中將其外の人々からうじて帰りのほり給ふ。京出給ひし程は雲霞と野山にたな引つる兵も、所々にて亡びつ、残りぬるはいとわづかなり。内にも聞し召驚く。大殿もいかにせましとさはがせ給ふ。宗盛などの平家の人々もしばしはあきれ給ひけるが、さて打捨んやはとて、こたびは知盛の中納言、重衡の中將、資盛の中將、貞能などをつかはし給は

んとす。新中納言と三位中將は勢多より、左の中將と筑後の前司は宇治路よりと定めて、文月廿一日、都を出給ふとぞ聞ゆ。又山に使をやりて衆徒ども公の御方に参るべく、さらば今より日吉の社を藤氏の春日の社になづらへ、延暦寺を山階寺のためしに、平家の氏の社、氏寺になし聞えて、ながく尊び奉るべきよし、前の内大臣をはじめ平家のむねとある人々、ひとつ心に名をつらねて、文こまやかにかい給へり。大衆もいなみがたく、いかになどいひかはせど、義伸もねんごろに聞ゆる事あればなん、やがてそなたになびきて京には返事も奉らず。義伸はそこばくの軍を従へ、いかめしきいきほひにて近江路より坂本に至り、大衆のしるべするまゝ、に山に登りぬと聞えしかば、都のちいみじうさはがしうなりて、人々は唯物にあたりつ、あはてまどひたり。五条わたりに住ばかりの、下が下なるもの共さへおそろしき事に思ひて、野山の末にも身を隠してんとて、悲しと思える妻子などを引つれ、あるは老たる親をたすけてあくがれさまよふ程、大路のさまもいとらうがはしく、俄に浅ましき

よとなりぬるぞせん方なき。一院さへ忍びて山に御幸あり、摂政殿又慕ひて参らせ給ふ。平家には、さり共と思ひし山の大衆も源氏に語らひとられぬるが心やましう、今は都に堪がたく覚えければ、内をも院をも具し奉り、しばし福原にうつろひなんと思ひ立けるに、院はいつか忍びて出させ給ひしと聞ゆれば、いとほいなくて、行幸ばかりを催し奉り、三種のおほん宝をもゐて奉り、玄上、鈴鹿などの代々の御物、殿上の御椅子、時の簡、さらぬもかすゝにとり具して、上も御車に奉り、何の御儀式もなくて出させ給ふ。女院、二位殿、親族の殿原みな行幸におくれじといそぎ給ふほど、いひしらずらうがはしく、唯今仇のよせ来らんやうに、女房、おさなき人々の泣まどひたるもあはたゞしげなり。大臣、中納言達など、うへをも御子達をもいざなひ奉り給へど、さらぬほとゞめ置給えるもあれば、見捨がたく出がてなるほど、いはん方なう哀なる事のみにて、一人心づよきもおはせず、唯夢路にまどふ思ひにて、あるにもあらぬ御さま共なり。惟盛の中將はとり分て心苦しうおぼいたため

り。此北の方は昔の成親の大納言の御女にて、おさなき程より見そめ給ひ、年比わく方なう、かたみに浅からず思ひかはして、君達もうつくしげなるもち奉り給へば、いよゝゝ哀なるちぎりおろかならず。女君は父の大納言浅ましうて失給ひしこなたは、心ばそきやうなれど、男君のかいゝしう物し給ふる、うしろやすくて、ひたすらに打頼み給える心ばへもらうたければ、男君、我身こそあれ、此人々をさへ行衛なき波路の末にたゞよはしなん事のいとあたらしう、びんなくてとゞめ奉りつゝ、心にもあらでふり捨給へるを、女君はうらめしう、「いかならん岩ほの中にも」としたひ聞え給えり。中將ことわりに見聞え給ひ、「さらぬ鏡の」とこしらへ給へど、我も心のみかきくられて、出もやり給はず。兄弟の殿原馬引立てそのかし奉り給へば、なくゝかへり見がちにて出給ふ。経正の君は、年比なれつかふまつりし名残も忘れがたくて、仁和寺の宮に御いとま聞えんとて詣給へり。人々都を出給へば、やがて家々に火をさして焼あげたり。保元よりこなた、廿年に余りて住なれし古郷も、

今日を限りと覚ゆる心地共には、「いとゞ深草」とのみ
思ひて行もやられ給はず。忠度、

ふるさとを焼野の原にかへりみて

末も煙の波路をぞ行

との給ふを聞て、経盛、

はかなしやぬしは雲井に別るれど

宿はけぶりと立のぼる哉

行盛の左馬頭は、都出るほどあはたゞしけれど、日比よ
みをき給へる歌どもを定家の君の許につかはすとて、
つゝみがみに、

流れての名だにもとまれ行水の

あはれはかなく身は消ぬとも

後の代の撰集に入て侍るをば、いかになきかげも本意あ
りてうれしうこそ見給はめと、いと哀になむ。又忠度は
歌の道に心ざし深くて、常に大后の宮の大夫の御許に参
り給ひけるが、今年二月、此大夫の君に院の仰言あり
て、撰集の事侍りしかば、かゝる折もまづまうでゝ、
「やりぬべきもさぶらはゞ、撰びあつめさせ給ふ中にも

加へ給ひてよ」とて、^(マ)読置給える歌を一巻さし置つゝ、
いとま聞えて出給える、いとゆうにも侍るか。さてな
む集には入られ侍りしかど、此人々は公の御かしこまり
なればとて、名をあらにはいはで、^(マ)読人しらずとぞ侍
る。故郷の花といふ事を、

さゝなみや志賀の都はあれにしを

むかしながらの山ざくら哉

集は千載集とて、文治の比奏覧は侍りしぞかし。かうと
りぐにいそぎ出給ひけるに、池の大納言ばかりは京に
残り給ひき。東よりかねて頼朝の聞えおこせつる事有て
とぞ。又、平氏ならぬは上達部、殿上人、大臣達まで行
幸にも仕ふまつり給はず、皆とゞまり給へば、院の上山
におはしますと聞て引つれ参り給えり。かくあはたゞし
かりしは、文月廿五日なりける。廿八日には、院の上都
に還らせ給ふ。今日は上達部、殿上人よそほしう引つく
ろひて仕ふまつり給ふ。義仲、行家などの源氏の武士
も、夷の衣なれどいとうるはしう花やかにて、六万騎の
兵をしたがへ、御前つかふまつれるもめづらかに、よの

つねにてはうたても有ぬべきを、かうやうの折は中々頼もしうつきくしかりし。一とせ都遷しなど、ことやうなる入道の心より、あいなき世のさはがれにて、行幸、御幸といそぎ立つ、かしこき帝のよろづ代をかねてトをかせ給ひし都をしも荒しはてんとし給ひしこそ、いく程なくてかく思ひかけぬ事の出まうで来べきしるしには有けれど、内、女院などのあさましうはるくとおはしましける事をかたじけなく、よの人思ひ奉れり。平家は福原にも有経がたくて、遙なる筑紫路に行幸なし奉れたり。京には一院政をした、めさせ給ふとて、平家の人々の司位をとらせ給ひ、上人は殿上の御簡けづらる。時忠の大納言ばかりはもとのまゝなり。又、其人々のしるよし、ける所々をば、源氏の武士共に給はらんとし召れき。八月、院の殿上にて除目の事ありて、賞行はせ給ふ。義仲を左馬の頭にて伊予の国を給はり、行家備前の守とぞ。此程、前の中納言師家の君、大納言に成給ふ。是は基房の大臣の御子にて、父大殿、一年清盛入道のはからふむねにて、妙音院の大臣おなじごと流され給ひけ

る。又の年はゆるされて帰り給ひ、此殿はしばし嵯峨におはしまし。今は五条の殿に住給ふ。院には罪なくしてづみ給ひし事、よとともに御心苦しう思し渡らせ給へば、立帰り公の御後見にもと思し召るれど、うかりし折さまを替給ひてしかば、口おしう本意なく思されけるにぞ、御子のきびはなるにつけさせ給ひ、むつまじき御心見えさせ給へるなるべし。此大納言、治承三年十月、とし八にて正三位中納言に成給える、よにためしも有がたう、人も浅ましきまでに見聞え侍りしに、いく日もあらで父の殿、同じ日つかさとられ給ひ、其後ゆるされ給へど、又つかさなどもなかりしに、今年十二にて大納言と聞ゆ。これはたおぼろけならず目もあやにて、入道殿もおもだ、しうよろこびかしこまり給えり。唯今大将とていましけるは、実定の内の大臣、右の大殿の御子なる良道の中納言ぞかし。院の上、帝のよしなきゆかりに引かれさせ給ひ、思ひかけず都を出させおはしまして鄙の長路にさすらへさせ給えるを、御心苦しう思し召れつ、時忠の大納言の許に仰言ありて、還御の儀を催させ給へ

ど、平家したがひ奉らざりければ、口おしう思召れて、皇子の中何れにまれ殊更にすへ奉らなんと申し召よらせ給ひ、摂政殿、其外の殿原みな御前に召れて御定め侍り。古へより下居の帝、ことに御ぐしなどおろさせ給ひて後、御卜、何くれの公事、伊せの警使の御定めなどは例なき事とて、此度やはじめならんと、よには申あひ侍り。人々御位は何方にかはと、とりく^くに啓してさだめかね給ふ。昔の高倉の御子もおとなしうならせ給ひておはします。又、故院の宮達もいとけなき御ほどなれど、すぎく^くうつくしうておはしませば、人々おもひなやみ給ひ、院も釣する蟹のうけめきて思したる、ことはりの御事になむ。さるは先帝西の国に行幸ありて後、廿日にあまりて都に嗣の君おはしませず、たからの位のむなしき事のかたじけなく、天照神の御らんぜん所も恐れあり。まいて劍璽などもおはしませねば、院もいと御心ほそう、かた^くに思し恠させ給ふ。さてやませ給ふべきならねば、終に高倉の院の四の宮、四にならせ給へる、御位に即せ給ふべくおもむけさせ給ふ。さりぬべき御宿

世やおはしましけん、三の宮をもさし越させ給ひ、かく定まらせ給える御事のいみじさぞたくひなう侍り。摂政もかはり給はず、天が下は院の上御心にまかせおはします。都の御守りは義仲仕ふまつりたり。始はうしろやすく、まめやかなるさまなりければ、院も御心落居て思し召れ、都の中も静にて、上下の人々よろこびけるが、もとよりさる片舎(ママ・田脱カ)に生立し者也ければ、ひたぶるの衷心にて、かたくなしき事のみなりしが、はては院のおはします法住寺殿に参り、いといたくみだりがはしきふるまひどもをしつ、やむごとなき御方々のそこなはれさせ給へるもかたじけなく、上人、北面の侍共などは数もなう失はれけり。御殿おとに火をさへさして、むくつけき事いふ限りなし。院もからうじて忍びて出させ給ひ、入道殿の妙音堂に渡らせ給ふ。上は御母君の七条に行幸せさせ給えり。摂政殿は宇治より奈良の方に行せ給ふ。平家の人々のあくがれ出し折にもや、立増りたるらうがはしさのめづらかなるまでに侍り。頼朝伝へ聞て、いとたいく^くしき事なりとめざましう思ひけり。此人は前の兵衛

の佐なりし。十月よりつかさ位もとの俣なりき。はやう鎌倉の里といふ所に家居して住ける。やがて弟なる範頼、義経などを都にのぼらせて、義仲がなめき怠りを咎めてんとすめり。京には政も義仲心に任せぬるやうにて、見苦しうかたはなる事多かりし。殿をも摂政とゞめ奉り、かはりには師家の大納言の無下にわかうおはするをなし奉り、大臣になしあげ参らせんとすれど、今げちもなければ、内の大臣の服にてしばしとけ給へるほど、摂政殿に内大臣の宣旨下れり。節会も行はれず、更に例もなく、かたはらいたき事は義仲申行ひ侍りとぞ。明る春は、義仲征夷大將軍にさへなれり。摂政殿の御父入道は義仲に睦ましうおはして、政をもうちくく口入給ふればなむ、よの人の参りつかふまつるさま、いにしへにははらずいきほひありて物し給えり。内には御即位も去年は音なくて、今年行はるゝなりと聞え侍る。睦月の廿日ばかり、東より範頼、義経そこばくの軍をしたがへて都に入しかば、義仲堪ずなりて、兵共ことくく討れ、其身も粟津野のわたりにて亡びにけり。誠平家は筑紫にも

有わびて、讃岐の国に遷ろひ、八島に宮作りしてありけるが、今年春のはじめ、また福原までのぼりて、津の国一の谷に城をかまへ、所せう兵をこめをきつゝ、須まの浦より生田の森かけて夜る昼守り怠らず、きびしうおきてたり。去年より所々にて折々戦ひありしかど、源氏いとかひなく打まけぬるやうなりしかば、平家の人々いみじうよろこびて、すこしはこゝろやすくつよくしうおほひたりしに、今年も院の仰言とて、都より範頼、義経討手使にて向ひにければ、つゝにそこをも落されて、先帝、女院御舟に奉り、大臣、中納言達船にて海づらいたゞよひ給ふ。殿原おほく討れ給ひ、そこばくの軍失はれて、数すくなう成ぬ。忠度も討れ給ひ、重衡はからめられて、京にゐて来れりと聞えしかば、古へ女院に宮仕へして有ける右京の大夫の君、

まだしなぬ此よの中に身をかへて

何心地して明暮すらん

此人は年比資盛の中將浅からずかたらひ給えりとて、平家の人々わきてむつましうおもひ置つゝ、そのよは重

衡、後の宮の亮にて居給ひて、「草のゆかりをば、何かは同じ事とや見ぬ」などたはぶれごち給ひし折、女、ぬれそめし袖だにあるをおなじ野の

露をばさのみいかゝわくべき

ありしにかはる有さまをいと哀に思ひやり聞えしとぞ。重衡をば東にゐて行しかど、東大寺焼ける人として、奈良の大衆申給はり、そなたにてうしなはれ給えり。惟盛の中将は忍びて高野などにまうで給ひ、那智の海に身を投給ふるは、げに生田の川もかひなく、其わたりの軍の破れぬる折、こゝらの人々なくなりて、よの中たのみすくなきまゝに、今はと思ひ果給へるこそ哀なれ。京にも物の聞えありて、右京の大夫、

「悲しくもかゝるうきめを三熊野の

うらはの波に身をしづめける

清経の中将もおなじはらから成ける、それも去年西の海にて、柳が浦とかやいふ渡りに沈み入給えりとよ。落とまる平家の人々は、須磨の波風のあらましかりしうち、又八島に御舟こぎよせて、上をもしばしおはしまさせた

り。京の事も折々ほのかに聞えて、文月御即位もありきといふをば、さすがに御心うごきて、女院などは哀に思し召るべし。秋に成行海づらは、朝霧さへ立へだてて、いと故郷の方は遙に、初雁の声待出ても、新玉章の言伝も覚束なく、まいて無は数そふ世の心ほそさもせん方なく、人々同じ所にだにあらで、かたへは立わかれつゝ、仇の守りなど絶ず心づかひせらるゝさへうればしう、打歎かれ給ふ。行盛の左馬頭、備前の道をかため給ふと聞えければ、過にし年は経正、忠度などもろ共に居給ひしを、今年はいかに心ほそく哀にならんと思ひやりて、全性大徳消息聞ゆるとて、

ひとりのみ波間に舍る月を見て

むかしのともやおもかげにたつ

とあるを見て、こなたも忘れがたうし給ふ事にて、返しに、

諸共に見しよの人は波の上に

面かげうかぶ月ぞかなしき

忠快といえる聖は、教盛の御子にいますかし。有つる一

の谷の乱れに兄弟の君達一時に失給ひしを歎き渡り給ふ程、左馬の頭おそくとぶらひ給えりければ、

憂身をば事とはずともかゝるよの

かなしき事はしるやしらずや

といひやり給へるに、行盛、

悲しさを余所の歎きと思はねば

人をとふべき心地だにせず

都には年の号も寿永三年はとゞめて、元暦に改まり、上の御位は、文月官の序にて即せ給ふ。摂政も義仲うたれし後、基道の大臣立かへり仕ふまつり給ひ、師家は大臣も摂政も退給ひ、もとの大納言にや。大嘗会も同じ年行はせ給ふ。三種の神宝おはしまさせで日嗣に備はらせ給える御事は、昔よりまたなき事にて、院も思しなやませ給ふやうなりしかど、御位の後、都の中ものどやかに、義仲が乱れもとみにしづまり、雲の上も昔にかはらぬ御有さまにて、上達部、上人うしろやすくつかふまつれるを御らんずるにぞ、御心おちるさせ給ひ、天照神の御慮にもかなはせ給える事にやとうれしう思し召れき。平家

さへ次第に勢ひ衰へぬるやうにて、失はるゝ人おほし。須磨の浦波の立さはぎし折、討れし人々の首ども京に参らせつるをば、大路の樹にかけられ侍りしとよ。鎌倉の頼朝も四位の加階賜はり、義経は五位にて使の宣旨かうぶり、左衛門の尉と聞えし。範頼は三河の守にや。又の年も平家討べう仰言ありて、源氏の兵共京を出つゝ、南の海に至りしかば、平家は八島をも出て、舟の中に日数を送りにけるが、弥生の末つゝに、長門の国文司の関のわたりにて戦ひの有けるに打負て、先帝も大海海マヤ・衝の波に立まじらせ給ひ、二位殿、知盛の中納言、資盛の中将、其外の人々みな底のみるめの物むつかしさもいはで、一つ心にふかう思ひしづみ給へる程、いみじなど聞えんも中々にぞ侍る。宗盛の大臣、御子の右衛門督時忠の大納言はいけどられ給ふ。神璽も海に入せ給ひしかど、浮び出させ給ひしかば、源氏の兵とりあげ奉る。宝剣はあがらせ給はずとぞ聞え侍る。女院も同じ流の水屑と思し入らせ給えるを、源氏の方に見付奉り、とかくして船に移し参らせたり。平家ことごとく亡びにければ、源氏の大

将達急ぎ帰り登るとて、御鏡、神璽二種のおほん宝、女院をも具し奉り、いけどりの人々ひきて、卯月都に参りたり。公には何事よりも、御宝のことなくて還らせ給へるをいみじうよろこばせ給ふ。宗盛、清宗などの京に入給ふるは、物見る人そこら所もなうつどひ侍り、やがて鎌倉にゐて行しに、又のぼり給える道のほどにて、二人ながら失はれ給えり。御宝はまづ鳥羽殿に渡し奉り、内より上達部、殿上人引つらねて御迎ひに参り給ひ、いとよそほしく、源左衛門尉も御前仕ふまつ、まづ官の庁に入らせ給ひ、そこより温明殿に渡らせ給ふ。上も大内に行幸おはしまし、三日が程御神樂侍りとぞ。公には又時忠の大納言、其外も平氏なる大徳達など、国々に流しつかはさる。大納言能登の国、御子の内蔵頭信基は備後の国、忠快法印は伊豆の国とか、とり／＼に別れて遙々とおはすなりけり。忠快大徳、都を出給える比、おそくとぶらひたりし人の許に、

身のうさか人のつらさかさとともと
おもふ日数をとはで過ぬる

全真僧都は筑紫に遷され給ひける。程へて召返されてのぼり給ひ、女院の大原におはしましけるとぶらひ奉りて、御物語聞えさせつ、昔の事さま／＼に思ひ出られ、涙もとゞめがたければ、

けふかくてめぐりあふにも悲しさは

此世隔てし別れなりけり

と啓し給へり。僧都は故入道の弟におはすれば、はなれ奉らぬ御事にて、まづと此御前にも参り給ふなめり。女院は御心にもあらでながらえさせ給ひ、京に帰らせ給ひても、有しにかはる事のみにて故郷としも思されず、中々うゝ／＼しう、よの中はしたなき御心地せられ給ひける。しばしは吉田といえる所に忍びておはしまし、かど、後には大原の奥なる寂光院に入せ給ひ、御ぐしおろして静に行はせ給ふ。先帝の浅ましかりし御宿世を物うく悲しき事におほひて、後のよの闇路のひかりなるばかり、まめやかに仏の道をのみなむねがはせ給ひ、まぎる、方なくつとめさせ給える、いと尊とき御さまに侍り。さぶらふ人とても、大納言の局、阿波の内侍などは

かりにて、松風の音さびしく、櫓の煙の幽なる御住ゐなれど、後には昔の心よせなる人もとぶらひ参り、一院さへおとづれ聞えさせ給へり。公には御宝の事なくて帰らせ給える折、其賞とて頼朝をば二位になさせ給ふ。義経は伊予の守にて都にさぶらひ、内の御守つかふまつれり。又平家の領したりし国共三十にあまりて侍りけるを、源氏の武士共にも賜はせ、さるべき所々は上達部などにもあかち給はせけり。院の上はさきくにかはらずよの政をした、めさせ給ふとて、先帝の口おしかりし御事をかたじけなく思し召れて、文治三年とか申侍る比、公の御さたにて御諡奉らせ給ひ、安徳天皇となん聞えさせ侍りし。天が下の君にて、わづかに三年おはしまし、六つにならせ給ふ秋、都を出させ給ひ、八つにて浅ましき御事に侍りし。其世に聞伝ふる人々、唯はかなき夢のやうになん思ひ奉りしはや。かくて都の中は、昔にかはらず時めきて、二度加茂河の水澄る御代とぞなり侍る。さてなむ、増鏡にも「おどろが下もふみ分て」など聞えけるも、此御時に侍るかし。

さきくも聞えし紫式部の六十帖の草子は、葉月望より書はじめ給ふとき、しに、今は其夜しも筆をとゞめ侍ることもやうかはりつれど、さりぬべき事と思ふなん、おこがましかりき。名をはいかいはんとおもひわづらひたるに、月をみるく、人の「月の行衛などこそいはめ」と聞え給ふに、いとうれしう、まことにいみじき名なりとゆへありておほえぬ。さりし月も七夕祭るひより手習はじめしを思ひて、此月もまた七日に筆をとり侍る。三巻にて今日、名におふ月の夜なむみちぬる事も、さすがにはなれぬゆへもこそとおもふさへ、いとおほけなしや。

あくがる、心のはては千さと、も
かぎらぬ月の行衛とぞ思ふ

右、月の行衛三巻、荒木田麗子の著し給ふなりけらし。こたび豊宮崎御文庫に納め奉らんと、つたなき筆をそめて書写し侍りぬ。

文化かかえ午の年水無月

正四位上荒木田興正妻

直女

〔付記〕 本書の翻刻を許可して下さった神宮文庫に厚く御礼申し上げます。

なお、本稿は平成二十八年年度科学研究費補助金（若手研究 B・課題番号 16K16757）による成果の一部である。

（くもおか あずさ・北海道教育大学准教授）